
ラストティーン

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストティーン

【著者名】

やしひ

【あらすじ】

19歳と20歳は、全然違う。「子ども」でいられる最後の夏に、10年前の両親の離婚によつて離れ離れになつた元・きょうだいが一緒に過ごす、自分自身を見つめるお話。

キットカットな関係

年も同じ、誕生日も同じきょううだいに、周りの人たちは口々に言つ。「君たちは、双子なんだろ?」と。

きょううだいは首を振る。「僕たち、三つ子なんです」と。あ、なるほどねえ。盲点だよ、それ。たしかに、双子じゃないもん、嘘は言つてないよなあ。

と、一人頷いてから、私と忍の関係を考えてみる。

年も同じ、誕生日も同じ。私たち一人をきょううだいだと知ると、周りはやつぱり口々に言つたものだつた。「双子なんでしょう?」と。顔は全然似てないけど、世の中にはそんな双子、いくらでもいる。だから、私たちもそんな双子に思われても仕方ない。事実、私もずっとそう思つていたというか、息することにいちいち意識を向かないのと同じ、当然のこととして、考えたこともなかつた。忍と私は、血のつながった姉妹なのだと。

「父さんは、母さんと離婚するから」

父さんが、幼い私を傷つけまいと、あくまでも優しく、穏やかにそうちり出したときは、内心来るときが来たんだなと思つた。すれ違ひ、という単語は案外どこにでも転がっているということを知らないほど、私は幼いつもりはなかつた。それに納得出来るかどうか、というのはまた別の問題なんだけど。

とにかく、私は父さんと母さんがもう同じ家で暮らさないこと、たぶんもう一度と会わないであろうことも、理解した。父さんは私を傷つけないようにと気を使いながらも、使う単語はどれも呆れるほど直球だった。遠回しな言い方が苦手な人だつたのだ。父さんの、優しい声色と出でてくる言葉の鋭さのギャップに着いて行くのに、私は必死だつた。

父さんは、これから先も私を育てる言つた。難しい言葉で言えば、親権を取つたということだろ? ドラマでやつてているような生々し

い言葉が父さんから出てきたときは、さすがに泣きそうになつた。

「だから、忍ともお別れしてな」

父さんのこの一言で、私はたつた今泣きそうになつた。思わず忘れてしました。

どうして、私と忍が？

唖然としている私に、父さんはやはりオブラーートなど欠片もない言葉で、優しく教えてくれた。

母さんも親権がほしいということ。父さんも親権をほしがっていること。子どもは、二人いること。育てる親も、あら偶然、二人いるね。

$2 \div 2 = 1$ 。父さんの残酷なまでにわかりやすい言葉は、私に実にシンプルな事実を示してくれた。

でも、私と忍はきょうだいでしょ。そんな、小学生が解くような式に当てはめて考えていいことなの？

キットカットを半分こにするような気軽さで進んでいく話に、私は目眩がした。

ドラマで、いかにも悪役面の俳優が言つていた。「夫婦なんてな、しょせん他人なんだよ」と。私は、そう言い捨てたときの名前も知らない俳優の顔が、口の動きに合わせて醜く歪んだことに目を奪われて、正直、セリフの意味をちゃんと捉えていなかつたけど、案外覚えているものらしい。夫婦は他人。納得出来るかどうかはやつぱり別問題だけど、理屈はわかつた。父さんと母さんは、もとは他人だつたから、また他人に戻るときが来たのだと。

でも、私と忍はそうじやないはずだ。血がつながっているんだから、他人じやないんだから、だから、これから先も他人になんかなりっこない。離れ離れに暮らすなんて、父さんと母さんみたいにもう会わなくなるなんて、そんなの理解出来るはずない。納得なんて、絶対に出来ない。

私の、言葉にならない抗議は父さんにも予想がついていたようで、ちゃんと説明してくれた。

「恵と忍は、本当のきょうだいじゃないんだよ」

父さんは、包み隠さず、幼い私にもわかるように教えてくれた。事実が、どれだけ私に大きな衝撃を与えるかまで考へるというのは、父さんには酷な話だろう。父さんは、嘘はつけない。変化球なんて無理なのだ。ピッチャーハンマーとしては致命的だけど、父親として失格だと言えるほど、私は年を重ねていなかつた。

父さんの話をまとめれば、こうだ。

私と父さんはたしかに血がつながつてゐる。忍と母さんも、正真正銘の親子。

父さんと母さんはそれぞれ同じ年の子どもを連れたまま結婚したんだそうだ。つまるところ、私と忍は、父さんと母さんが夫婦だからこそきょうだいという、本来はつくばずのない冠をお互いに見ながら育つてしまつた。

忍は他人。父さんと母さんが、もとは他人だつたように。

来るときが来たから、また他人に戻る。

血がつながつていないと、他人という単語を連呼する父さんの顔は、あのときの俳優のように、口元が歪んでいた。震えている、と言つた方が正しいのかもしれない。

ストーリーも、俳優がそのセリフを口にするに至つた脈絡も忘れてしまつたけど、私は唐突に、その俳優が実は見せていた態度ほど余裕を持てていなかつたんじやないかと思つた。

そうじやなきや、今の父さんと同じような表情になるはずがない。父さんは、事実に忠実に着いて行くことが出来るほど、強くはないのだ。今だつて、自分の出した言葉に、自分でダメージを受けていふ。幼い私を、そして自分自身を、現実という動かせない障害物から少しでも回避させてダメージを軽くさせることが出来るほど、器用ではないのだ。

私は頷いた。何に対してもか、自分でもよくわからなかつた。

でも、小学生の私でもわかる理屈がちゃんとあって、父さんが傷ついていて、私が父さんを責めることでは誰も楽にならぬことがわ

かつてから、そうした。重力に促されるまま、顎を引いた。目線は下がる。

私と忍は、年も誕生日も同じ、きょうだい。でも、双子じゃない。まして三つ子でもない。

それは、私と忍が、もとは他人だから。

キットカットはもともと一つにくつついているけど、私と忍はそもそもくつついですらいなかつたのだ。

キットカットを割るよりもずっと自然な流れで、私と忍は他人に戻つた。

キットカットな関係（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました！
試行錯誤を繰り返すことになりそうですが、温かく見守っていただ
ければ幸いです。

手紙に関する一考察

時代の流れとは、読んで字の「じとく」本当に川のようになつて行くんだなあ、とそんなことを考えた。

フロッピーディスクが博物館行きになる、といつのがあながち笑えない現実になりつつある今、同じく時代と言つ、逆らい難い川の流れに追いやられてしまったものを、私は今、手にしている。全国共通のデザインの80円切手の貼られた、可愛らしい封筒。業務用に使われるような無骨な茶封筒ではなく、外見重視のレターセットのものだ。メールがシニア世代まで浸透したこの国じや、もはや旧世紀の遺物、博物館の住人のポジションに甘んじていると言つていいんじやないかな。

とまあ、久しぶりに目にしたレターセットにばかり目を向けることで、私は肝心な事実から目を逸らそうとしていた。

「梶山恵様」

丁寧な字で書かれた宛名は、まさしく私に向けてのものだった。私の部屋のポストに入つていたのだから、当然だ。

しかし、問題は差出入の名前だ。

「見原忍」

控えめに、隅に書かれた名前に、私はため息をついた。困つたなあ、の意味でもなく、おいおい勘弁してくれよ、の意味でもない。

自分でも正体のわからない感情が、吐く息に乗つて出てきたとしか言いようのない、あまりつく機会のないため息だつた。

見原忍。そうか、もうとつゝの昔に、梶山忍じやなくなつてるんだもんなあ。

手にしたもの、なかなか開封するふんぎりがつかず、私は取りとめのない思考にふけりながら、私に開けられるることを待つている手紙をとりあえず意識から外す。

見原忍。10年前まで、私のきょうだいだった子だ。

両親の離婚をきっかけに、私たちは戸籍上、他人になつた。別れて以来一度も会つていないことも踏まえると、距離の意味でも他人と言えるんだろう。

そんな関係になつた忍が、どうして私に。10年も経つた今、何を伝えたいんだろう。

もしかして、母さんのこと？

忍の手を引いて出て行つた、10年前まで母さんだった人の背中が浮かんだ。

母さんの身に何か起つたのなら、たとえ何年経とうと、忍は私に連絡を取ろうとするはずだ。

普通は電話を寄こすところだけど、私の携帯の番号を知らないんだから、手紙にしたのか。

と、そこまで考えて、改めて首を捻つた。

忍、どうして私の今の住所を知つてているんだろう。

私は今、実家というか、父さんのもとを離れて一人暮しをしている。通う大学が県外だったからだ。

忍は、どうして私の住所を知つてているんだろう。

疑問には思つたけど、今は大して重要なことじゃない。

母さんの身に何か起つたかもしぬれないのだ。とにかく、読んで状況を把握しなくちゃ。

可愛らしいシールの貼られた開封口を避け、端から破る。急いで目を通そうとした、その動きが一瞬止まる。

自分の眉がぐいぐい寄つて行くのをはつきりと感じながら、予想していたものとかけ離れた内容の手紙を、黙つて読んだ。

久しぶり、元気だったかな？ボクは元気です。

10年も会つてないから、ひょっとしてボクのこと忘れちゃつてるかな、つてちょっと心配だつたんだけど、こうして読んでくれてるつてことは、覚えててくれたんだね。よかつた。

まあ、どうせケイちゃんのことだから、母さんの身に何か起こつたと勘違いしてこの手紙を開けたんだろうね。ハガキにしなくてよかつた。ケイちゃん、読まずに捨てちゃうかもしれないから、あえてレターセットを買つてきました。

いやあ、レターセットつて、案外売つてるもんだね。時代の遺物、とか思つてたけど、需要あるんだね。感心しちやつた。

あつ、待つて待つて。まだ本題に入つてないから、お願ひだからまだ破らないでね。

今回この手紙を送つたのは、ちゃんと理由があるんだ。

ケイちゃんの大学、もう夏休みに入ったよね？ボクのところも、もう入つたんだ。

そこで、ケイちゃんの一人暮ししているアパートにボクをしばらく置いてほしいんだ。

ほら、大学生の夏休みつて、長いでしょ？夏の思い出を作ると思つて、一人くらい、ね？

もちろん、食費とか家賃とか、実費はボクも負担します。経済的な負担はケイちゃんにかけないから。

それに、食事とか家事とか、一人暮しだといろいろ面倒でしょ？ボクがやるから、ケイちゃんは、無料でハウスキーパーを雇つたと思つてくれればいい。無料だよ。いい響きでしょ？

ね、ケイちゃんもいろいろ思つとこはあるだらうけど、助けると思つて、このお願いを聞いてほしい。

ここまで読んで、またため息が出た。

今度のは「困つたなあ」とか「おにおい勘弁してくれよ」の感情が

はっきり出たものだとわかる。

ついでに、「何を考えているんだこいつは」も混じっている。

便箋には、明日の日付で、ここから近い場所にあるファミレスで私を待つといつ旨が書かれていた。

来てくれるまで、ずっと待つているから。

最後の行に書かれたこの一言に、私はまたため息。まったく、この短時間に何回、私にため息をつかせる気なんだらう。

嫌なら、待ち合わせに行かなきゃいい。

私と忍はもう10年も前に他人になつたのだ。今さら、会つて何を話せばいいのか、さっぱりわからない。しかも、一時的であるとはい、自分の家に泊めてやるだなんて。

あまりにも一方的な内容だし、しかも困つたことに、忍の連絡先は書かれていない。絶対に、わざとだ。メルアドでも書かれていれば、「悪いけど、無理だから」の一言ですむ。

わざわざ会わなきやならないシチュエーションを作る忍のあざとさは、全然変わつてない。しかも、19にもなつて、未だに一人称が「ボク」なのか。

ホント、全然、変わつてない。

ちょっと多めに息が出てきた。でも、たぶんこれはため息じゃない。だつて、吐いたあと、あんまり悪い気はしなかつたから。

でも、いきなり泊めてやるだなんて、やつぱり横暴だ。

私たちは他人なんだから、泊めてやる義理なんてない。

とりあえず、直接会つてから、ガツンと言つてやるんだから。

私は、忍のセンスの良さを感じさせる品の良い封筒を軽く撫でながら、この日何度目になるのかわからないため息を、またついた。

手紙に関する一考察（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。次から一人称が妹の忍に交代です。

待合室に関する一考察（前書き）

今回は妹の忍が主役です。

何事にも、「ふさわしい」場所があるのだと、お母さんはよく言つていた。

たとえば、初デートでの待ち合わせなら、ちょっとおしゃれなカフェ。相手を待つている間に座つていられるから、待つことがストレスになりづらいし、何より会つた時点ですぐにお茶ができる。アイスコーヒーで喉を潤してから、街へ繰り出す。つん、なかなか無難なスタートを切れるね。

事務的な用事で、嫌いな相手と一緒にいなきやならないときの待ち合わせなら、駅かな。遅れたときの言い訳がしやすいし、人が大勢いるから、会つてから最初に来るであらう沈黙も、うまいことかき消される効果が期待できる。

ま、全部お母さんの受け売りだから、本当のところはわかんないんだけどさ。

それじゃあ、10年間会つていなきょうだいとの待ち合わせは？こんな待ち合わせのパターンを考えることになつた人つて、いつたいどれくらいいるんだろうね。考えて、ちよつと笑えた。お母さんだつたら、何て言つかな、なんて。

今回ケイちゃんと会うこと、お母さんには言つていない。ボクだって、もう大学生なんだから、いちいち親の許可を取つてから外出する必要性なんてない。

言つたら、怒るに決まつて。怒つて、黙るんだ。お母さんは、自分の感情を、制御出来なくなるほど高ぶらせると必ず黙つてしまう。目も合わせない。普段の、取引先をあれよあれよといつ間に丸めこんでしまうような饒舌ぶりと、ソースの似合つキャリアウーマンぶりからは想像もつかないほど、怒つたお母さんは子供じみている。いい年した大人が子どもに転じる瞬間を、ボクは好ましく思つてない。ぶつちやけ、鬱陶しいとさえ思う。人は、年と共に、戻れない

い成長をしていくべきだと思うから。

と、そこまで考えてみて、ボクは一人笑つた。

ボクもケイちゃんも、10年、年を取つた。お互い、外見もかなり変わつてゐるだろう。会つたとして、お互いがわからないなんてことも充分にありえる。

いや、そもそも来ない可能性の方が、ずっと高い。

窓際の席で一人歯杖をつき、窓へと視線をやる。笑つた顔のボクと目が合う。

こりや、来ないなんて欠片も考えていない顔だな。

そう思つて、窓に映つた顔にまた笑顔が広がる。

ケイちゃんに宛てた手紙に、ボクへの連絡先は載せなかつた。

ケイちゃんは、昔から人と目を合わせるのが苦手な子だつた。

作文は得意だつたけど、とにかく一対一の直接的な接触に抵抗があるみたいで、思つたことをうまく言葉に出来ないきらいがあつた。だから、会いに来てさえくれば、絶対に首を縦に振らせる自信があつた。ケイちゃんには悪いけど、ボクにもちゃんと理由があるんだ。10年分のブランクに、あえて踏み込む、理由が。

ケイちゃん、来てくれるかな。

傍らの空席に置いた荷物を見やる。すでに、泊めてくれることを前提に荷物は持つてきた。少量ではあるけど、一人で入るファミレスに、この荷物はちょっと浮く。このまま待ちぼうけで出なきゃならないとしたら、なおさら。

頭では、そうわかっているものの、ボクは自分の口元に浮かんだ笑みをしつかり自覚していた。

大丈夫。ケイちゃんは、必ず来てくれる。

おおかた、面と向かつて断ろうという算段なんだろうけど、知らんぷりを決め込んで誰かを待ちぼうけにさせたりなんてしない。絶対、しない。

ケイちゃんは、そういう子だ。肝心なところで、優しい。

誰かの入店を告げるベルが鳴る。BGMに紛れてしまつよつた控え

めな音だけど、店員と、待ち合わせのいる人間にとっては聞き逃し
ようのない音。

やつかいな問題を抱え込んだように、眉を寄せ、堅く唇を結んだ女
の子が入ってくる。

ボクは、その子の表情と対極な感情が自分に浮かんでくるのを自覚
しながら、手を振った。

待合室に関する一考察（後書き）

読んでくださっている方がいるかどうか、正直自信がありませんが、まだまだ続きます。次回の主役はお姉さんの恵です。

双子の魂、ルリモ（前書き）

今日は恵の一人称です。

双子の魂、ルリルで

「三つ子の魂百まで」って言葉、昔はよくわからなかつた。昔というのは、私がまだ忍と双子だと思つてたときのこと。三つ子とはすなわち三人同時に生まれてきたきょうだいのことだと思つていた私に、魂百まで、の正しい意味がわかるはずもない。百歳までなら、三人とも元氣で生きていられるつて意味だと思つていたのだ。

私たちは双子だから、ちょっと割り引いて「双子の魂八〇まで」なんて言うのかな、なんて。とんでもない思い違いだ。

無知で、幼稚で、どうしようもなくもう、私の期待。八〇歳までなら、私と忍は、魂をつないだまま生きていけると、そんなことを思つていただなんて。

「ケイちゃん、全然変わつてないね」

向かい合つて座る忍がにっこりと笑う。

「あれ？ あんたもね、とか言わないの？」

どの口がそんなこと言つてんのよ、という私の言葉は、私の燃料切れによつて忍まで届くことはなく、内部に留まつてぐるぐると回る。流行なんて眼中にならかのような無加工のショートカットは、小首をかしげた拍子にさらさらと流れ、きめ細やかな光沢を隅々にめぐらせる。

部屋着です、と言わんばかりの無頓着さがありありとわかる無個性なTシャツの袖口から覗く腕は、この季節には不釣り合いなほど白い袖に、座つていてわかりづらいはずの忍のスタイルを、嫌味なほどに主張している。

化粧気なんてまるでないのに、整つた顔立ちが「これが完成品なん

です」という貫禄を漂わせている。

正直、かなりの美人だ。

男子子みたいに素っ気ない服装といい、「ボク」という一人称といい、忍が自分の性別をあまり意識していないところは昔のままだけど、今はそれも相まって忍という人間の美しさを形作っているのがわかる。

「背、伸びた？」

我ながら、バカな質問だなとは思つ。別れて暮らしが始めたのは小学生のときなのだ。あれから、もう10年経つ。伸びないわけがない。

「ちょっとだけね」

忍は、ふつと微笑んだ。微笑む、つて言葉がしつくつくるよつな、綺麗な笑みだつた。

「昔は私の方が高かつたのに」

「ちょっとだけね」

「おかしいわよ。あんた、あんなに牛乳嫌いだつたのにさ。私なんて、今でも毎日飲んでるのよ。その私を抜くつてことは、当然飲めるようになつたつてことなのよね？」

「ちょっとだけね」

「だいたい、痩せすぎ。昔から細い方だとは思つてたけど、今のあんた、ゴボウだよ、栄養通つてないのよ。どうせ、気が向かないとか言つて、食事抜いたりしてるんでしきよ」

「ちょっとだけね」

「だいたいね、非常識なのよ。今日は、その、たまたま暇だつたら直接会つて断るつと思つて來たけど、普通来ないよ。10年も会つてないんだから、当然でしょ。非常識よ、自覚してんの？」

「ちょっとだけね」

「何があつたんでしょう」

忍は、ふいに黙つた。顔にはさつきまで浮かべていた笑みの名残りが張り付いているけど、口の端がちょっと震えてる。

そういうとこ、お父さんそつくり。血は、つながつてないのにね。

「ちょっとだけね」

忍は、それだけ言った。

わざとらしい笑い方すんの、やめなさいよね。その笑顔、あんたが思つてゐるほど、何も誤魔化せてないんだから。

「ちょっとだけね」

今度は、私が言った。忍は、何も言わない。

「あんたが、変わったと思つた。まあ、そりや、外見が変わつてるのは当然のことなんだけど」

三つ子の魂百まで。その言葉の意味、今ならちゃんとわかる。3歳までに出来あがつちやつた人格は、死ぬまで変わらないってね。間違つても、ずっと仲よしで生きていくって意味じやない。忍、あんたはちゃんと変わつた。私を頼りたいと思つてるくせに、その理由は打ち明けない。秘密主義つてわけ？昔みたいに、なんでも共有出来るはずがないってわけ？まあ、それが普通だよ。私、今のおんたのこと、何も知らないもん。

昔の記憶の断片をかき集めて、今のあんたにはならない。それは、わかる。わかるからや。

「私はあんたの言つとおり、ちつとも変わつてないから、だから、ちよつとの間だけ、あんたの変わつたところを見ててもいいかなって、思う」

忍から、貼りついた笑みが消えた。

「忍、なんて顔してんのよ」私は笑つてやつた。「鳩が豆鉄砲喰らつたら、今のあんたになるわね」

忍は、ふいに目を逸らすと、ふてくされたようにつぶやく。

「うまくやるつもりだったのに」

「は？」

「ケイちゃんは、人の頼み断るとか、苦手だから、だから、うまく丸めこんでやううと思ってたのに」

「失礼ね。人をダンゴムシみたいに」

「なんか、すごく大きい借りを作つちゃつたのかも」

「馬鹿ね。かも、じゃなくて、実際その通りなのよ。しつかり働きなさいよ」

つこわつも顔を合わせたときと、私たちの表情は交換したみたいに真逆だ。

でも、思つてゐることは、せつと回づ。

魂をつないだまま生きていこうとなんつて出来ないけど、お母ごとに歩み寄ることは、たぶん不可能じゃない。

三つ子の魂百まで。

双子じゃない私たちは、どうまで変わつていけるかな。

双子の魂、ルリルで（後編）

読んでくださりありがとうございました。・・・つて、このメシ
ページまで辿りついた方がいらっしゃるがどうかせ、毎回疑問な
ですが。

似てゐるボク、知らないキミ（前書き）

今回は忍の一人称です。

似ているボク、知らないキミ

誰よりも早く起きて、自分の食べない分までご飯を作つて、寝ぼけまなこをこすつて起きてくる家族に無償で、何もかも整つた朝を提供するのが母親の仕事なのだとしたら、ボクはまさにこの家の、ケイちゃんの母だ。

「おはよう、ケイちゃん」

ケイちゃんの言葉を遮るように先制。にっこりと笑えば、ケイちゃんは神妙な顔になった。

「本当にご飯、作つてくれたんだ」

「そういう約束でしょ？ ボク、こいつのけつこいつ得意だから、心配しなくていいよ」

フライパンを傾け、こんがり焼き上がつた目玉焼きを白い皿へとスライドさせる。フライ返しなかつた。ケイちゃん、オムライスとか作らないのかな、ないとけつこいつ不便だと思つんだけどなあと考えながら作れば、いつの間にかあんなにぐつすり眠つていたケイちゃんも自力で起きる時間になつていたらしい。

「はい、ちゃんと食べて力つけてね。今日、学校なんだっけ？」

「うん、まあ」

「てつくり夏休みだと思つてたけど、まだテストが残つてたなんて、大変だよね。あ、ちゃんと黄身は固めておいたよ。好み変わつてたりしないよね？」

「よく覚えてるね、好みとか」

ケイちゃんは相変わらず神妙な顔のまま丁寧に手を合わせ、「いただきます」と言つてから箸を取る。

ボクもそれに倣つてちゃんと手を合わせる。一人分の動作があるわりに、この部屋は驚くほど静かだ。

昨日、ケイちゃんの部屋に入った。招かれたというべきなんだろうけど、ボクは間違つてもお客様なんて身分ではない。居候というか、無料のハウスキーパーというか、とにかくケイちゃんとした身分はないのだ。

そこは忘れちゃいけないなと思ひながら入つたものだから、「掃除が楽そうな広さだね。うん、学生の部屋の見本だよね」とか「ここ家の家賃、さぞお得でしょ?」なんて正直な感想は口に出さないでおいた。間違つても、「なんか、狭いね」などとは言つていない。

「狭いからね」

玄関から部屋の隅まで6歩で到達してしまったボクに、ケイちゃんは無愛想に言つ。

後ろめたく思つていいんだな、となんとなくわかつた。自分のテリトリーのマイナス要素を見られたんだ、恥ずかしいに決まつて。ケイちゃんの照れ隠しのベタさに、ボクは今さらになつて自分の子どものような身勝手さを恥じた。

「「めんね、無理言つて押しかけるよ」」
「でも、出ていく気はないんでしょ?」

引きつった笑顔を張りつけて何も言えないボクに、ケイちゃんは「別にいいよ」と素つ気なく言つた。

「私が泊めるつて言つたんだから、追い出したりしないわよ」
当面の間はね、と付け加えてから、からかうように笑つたケイちゃんは、ふと思い出したように表情を戻してから「だから、延長には必ず私に理由を言つ」と付け加えた。

目が合つ。大きくて、とても綺麗な目だ。色素が薄いらしく、普通よりずっと茶色がかつている。

日に照らされると透き通るよつと金色に近づくの目を、ケイちゃんは嫌がつていた。昔、クラスメイトに気味悪がられたそうだ。
綺麗な目だ。そして、ちょっと怖くもある。

こつちの思惑なんて全部見抜いていそうな怖さ。

ケイちゃんの目を気味悪がつたという当時のクラスメイトも、たぶ

んボクと同じ理由で目を逸らしたんだろう。

でも、ボクはもつ田が何かを見通すなんて錯覚を信じる年ではないから、「理由? そんなの、ケイちゃんどもつと一緒にいたいからさあ」とおどけて笑う。

蛍光灯に照らされたケイちゃんの茶色の皿は、ボクの本音をどじまで読みとれたんだろう? 伏せ目になつたケイちゃんの目からは、何も読みとれない。

「うううううう」

食べ始めたときと回じよつてきちよんと手を合わせるケイちゃんに、ボクは「お粗末さまでした」と言ひ。

「どうだつた? おじしかつた?」

「うん」

「嫌いなものとかあつたら言つてね。極力、避けるかい」

「うん」

「今日は買ひ出しへ行ひ、と黙つただけじゃ、近くにおすすめのスーパーとかある? ほり、ポイントカードとか持つてゐなら、それも預かつた方がなにかと都合がいいでしょ」

ケイちゃんは何も言わずに黙つてボクを見ている。

「ケイちゃん?」

「不思議だなつて、思つたの」

ケイちゃんは独り言のようになつぶやいた。

「忍、お父さんみたいだか?」

おとうさん。ボクが使わなくなつた単語だ。そつか、ケイちゃんは使うんだよね。

「お父さん、普段朝食とか作つてくれたんだ」

「ううん、料理は私の担当。そつじゃなくて、忍がお父さんみたいだなつて」

お父さんみたい。それつて、ボクのどんなとこを指して言つてい

るんだね。」

「血、つながつてないの?」ね。忍とお父をさつて、似てるよ。自分
じゃわからぬいだろ?「ナビ」

ケイちゃんはそれだけ言つと立ち上がり、出かける支度を始める。
いつてきます、と出でこいつとあるケイちゃんに、ボクはまとも
ない思考回路で口走つていた。

「お父さんの」と、好き?「

自分でも何を言いたいのかわからなかつた。

ただ、ケイちゃんの開けたドアから差し込む朝日がケイちゃんの田
を金色にしていて、それに焦つてしまつたんだと思う。
何もかも見透かされてる。そんな焦りに駆られて。

「好きだよ」

ケイちゃんはドアから入り口を一步踏み出してから、一度振り返つてか
ら進つ。

「忍と回じへり?」ね

ドアは閉められた。狭い部屋こす、まはや何の音もない。

「それじゅ、答えになつてないよ・・・」

ボクの声が、やけに頼りなく部屋に残つた。

似ているボク、知らないキミ（後書き）

お疲れさまでした。伏線と言つにはあまりにもお粗末ですが、なんとなくでもこの一人の家庭環境を覗いてもらえたなら幸いです。

似ていない色（前書き）

姉・恵の一人称です。

似ていない色

信号機の色というのは、人間が持つている「色」に対する潜在意識とわりと強く関わっている、らしい。

難しい言葉で考えるといまいちピンとこないけど、要は「赤」というのは人間の危機意識のイメージに一番近いということだ。危機意識だつて。これも難しい言葉に入るのかも。説明しろって言われたら、正直私は小学生にもわかるように滔々と語れる自信がない。

そして、今は小学生ではなく、専門家である大学の教授にテストへの解答という形で、私は今説明を要求されている。

『新保険法と旧法の概略を説明し、その違いを述べよ』

日常会話じゃまず使わないだろうこの一文の下には、延々と空白が広がる。早い話、まつたく答えを書いていないということだ。

周りの邪魔にならない程度の大きさで、ため息をつく。

大学のテストを受けるのは2年生の私にとつて当然、初めてのことではないけど、この気の滅入りようにはなかなか慣れられない。選択問題が一つもなく、イエス・ノーを聞いてくれることはない。

高校までの過程と大学での違いは、模範解答が用意されていないことだとつづく思う。

どうして戦争が起ころのか知るのが高校までの過程。

どうしたら戦争を終わらせられるのか考えるのが、大学。答えなんて、誰も持つていやしないのだ。あるのなら、とっくに世界は平和になつている。

答えのない、いや、答えがまだ見つけられていない、そんな命題を抱え、ひたすら「答え」に近づけるように迷走していく。それが、大学生の本来の存在意義だ。

存在意義、か。

自分の連想に、ちょっと笑ってしまった。

それが本当に私たち大学生の存在意義なら、この大教室を埋め尽くす学生のうち、いったい何人が自分の存在を許されることになるんだろう。

300人が入れるこの大教室は、今日はほぼ満員状態。テストを受けないと当然単位は取れないし、そうなればやくゆくは卒業も遅れてしまう、なんてことになりかねないから、毎回ほとんどの学生はちゃんと受けにくる。

いつもの授業ではこの人数の3割引き。ちゃんと起きていって、なあかつ携帯をいじっていなくて、隣の席に座つた友だちと小声のつもりでおしゃべりに興じていらない人数を引いていたら、半数残るかも、ちょっと危うい。

無心になつてシャーペンを走らせる音と、遠くの方で無遠慮に鳴りだした携帯の着信音、不正が見つかって教室の外に連れていかれる学生の、小さいながらも緊迫した弁解の声を聞き流しながら、保険法の概略をメモ程度に解答用紙に書きだしていく。事前に復習しておいたおかげで、集中し始めればすんなりと空白は埋まつていく。新保険法の特徴を思い出しながら文の構成を組み、判例やら学説やらも付け加えると、大きすぎるよう見えた空白はあっさりと私の文字で埋まつてしまつた。予想していたよりもずっと呆気なかつたけど、これが本当に正解なのかどうかは、自信がない。見当違いのことばかりつらつらと並べて、蓋を開けてみれば単位を落としていた、なんてことはよくあることだから、油断は出来ないけど、やれることはもうやりつくした。

すぐ隣にある窓を見る。入道雲が広がる、真夏の空だ。

ふと、忍のことを思い出した。昨日から私のアパートに居候している、元・妹の忍。

「そらいろ絵の具はね、空の色じゃないんだよ

大教室のいろんな雑音を跳ねのけて、ぱあんと、忍の声が私のなかで閃く。あまりにも鮮明で、一瞬忍がこの教室に乱入してきて叫んだのかと思つほどだった。

忍といつ額縁で切り取られた、青と白だけの空。

10年前の、まだ幼い忍との記憶が、その2色に吸い寄せられるよう再生される。

「ほら、水色って、青と白を混ぜ合わせたような色でしょ。なのに、水って実際は透明じゃない。それと同じでさ」
筆を片手に、パレットの上に空の色を作り出していく忍の横顔が蘇る。

夏休みの宿題で、空の絵を描いていたらしい。
絵を描くのが好きな忍とは対照的に、私はその課題に全然、乗り気じゃなかつたんだつけ。

お父さんに新しく買つてもらつた絵の具セットの中に入っていた「そらいろ」とラベルの貼られたチューブを見つけ、これ幸いと絞り出したときのことだつたはずだ。

面倒だから、この色を画用紙に塗りたくつて提出してしまえばいいや、と。

「そらいろ絵の具も、空の色とは似ても似つかない色なんだよ。こんなに重い青なら、ボクなら『深海色』ってつけるけどね。この絵の具を売りだした人つて、ネーミングセンスないよね」

想像とかけ離れた色が出てきたことに呆然としている私に、忍はなぜか焦つたようにペラペラとよくしゃべる。

「ボクも初めて見たときは驚いてさあ、水で薄めたら、ちょっとはそれらしくなるかなとか思つたんだけどさ、全然、そんなことなくて。ほとんど紺色なんだもん。夜空って意味だつたのかな、そういうつて。そのわりには、青が強すぎるつていうか。そう、ホント、深海つて感じ。あ、ボクも深海なんて見たことないんだけどさ、イメージにこう、近いっていうか

いつの間にか筆を置き、私に向き合つてやけに真剣によくわからなことをしゃべり続ける忍の姿がなんだかおかしくて、私はちょっと笑つてしまつた。

べつに、私がそらいろ絵の具に失望しようがどうしようが、忍に非

があるわけではないのに、なんでこんなに一生懸命になつてるんだろ。

忍はたぶん、弁解してるんだろう。何に対してもかは、全然、わからぬけど。

「……ケイちゃん？」

急に私が笑い出したものだから、忍はきょとんとしている。大きくて形のいい目が、マヌケに見開かれている。

「忍は、空の絵、描けた？」

笑ってしまった理由を話すのもなんだか悪い気がして、話題を変えようと、私はすぐ隣で同じように絵を描いていた忍の画用紙を覗き込む。

「……ケイちゃん？」

今度はいぶかしむように、忍の声はひそめられていた。
私が身動きもせずに黙りこくってしまったからだろう。

風の流れまで感じられるような雲が夏の太陽を日指して広がつていて構図を、濃淡のついた青が包んでいる。小学生が学校の宿題のために描いた絵とは思えないほど、美しい絵だった。

でも、私が言葉を失つてしまつたのは、たぶんそれが理由じゃない。画用紙に隙間なく敷かれた青が、よく知る空の色とは全然、違う色だったから。

世界に、こんなにきれいな色があるのか。

たかが10才、世間知らずの戯言だと自分で笑つことが出来ないほど、その青には存在感があった。

同じ絵の具セットを使つたところで、誰もこんな色を出せないだろうと思った。

外に出れば延々と広がる空が世界中を覆つっていても、どこを探してもこの色が見られることはないと思つ。確信に近かつた。

「ちょっと変な色だつたかな」

私の沈黙を取り違えた忍が、今度は気まり悪そうに笑つ。

「欲張つて、いろんな色を混ぜたんだ」

「こんなつて・・・普通、青と白だけでしょ、う、空つて」

なんとかそれだけ言つて、すぐ近くに置かれた忍のパレットを見る。言葉通り、縁やら桃色やら灰色やら、晴れた真夏の空といつモチーフとはおよそ関係なさそつた色が点々と出されている。

「うーん、まあ、たしかにそうなんだけども」

忍は困つたよつて、言葉を探してくる。うまく説明出来ない、という感じだった。

「青と白だけだと、混じつけがなさすぎて、きれいすぎるので、こういう感じだつた。

「それじゃ、ダメなの？」

私の問いかけに、忍ははにかんだように頷いて答える。

「全部ひつくるめて、仲間はずれはいけませんつてこと、かな」忍の言葉の意味するところは、正直私にはほとんどわからなかつたけど、いつもそういうふうに、私はわかつたような顔をして頷いた。

「仲間はずれ」にそれなかつたたくさんの色が混じりあつて、忍の「空」は、どうにもない空になつた。それだけは、なんとなくわかつた。

それ以来、真夏の空の「青」に、私は忍を連想するよつになつた。「やめ。それでは、書くものを置いて、教員の回収を待つていてください」

教授の声が大教室に響く。

雑音が大きくなる。それでも、忍の声は私の頭からなかなか離れないよつた。

そらいろ絵の具はね、空の色じゃないんだよ、と。

でも、それじゃあ私に空の色を作るのは無理。わかりやすい言葉で、ちゃんと形がないんじや、びつやつて作つていけばいいのか、わからんないもん。

後ろからやつて来た試験官の先生が、私の解答用紙を回収していく。取られる間際に見た私の解答用紙の文字の群れは、やけにスカスカ

に見えた。やつれまでは、ちゃんと書けたような気がして、いたんだ
けどな。

イエス・ノーで答えられない、「正解」のない問題は、これだから
嫌だ。

息を吐く。やけに長く、ため息みたいになってしまった。
テストにも絵の具にも、「これだ」とわかる、たしかなノウハウが
あればいいのに。

自分で一から作つていかなきゃならないなんて、途方もなくて私の
手には負えない。

もう一度、窓の向こうに広がる空に目をやる。
似てないね、全然。

私がチユーブから出した「そういう絵の具」にも。
忍の「空」にも。

それが、少しだけ、悲しいことに思えた。

似ていない色（後書き）

私の絵の具セットに入っていた「そらいろ」はやたらと暗かったのですが、これは万人に共通の思い出なのでしょうか・・・？一応周囲の人たちに確認はとったのですが、中には「ちゃんと空の色だったよ」という人もいて、絵の具セットの格を見せつけられたような気がしたものです。

そしてサイレンは鳴る（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

そしてサイレンは鳴る

自分はいつたい何者なのか？

高校の授業中、教科書のなかでこの言葉を見つけたとき、短い間だつたけど、息をするのを忘れた。

苦しかった。酸素不足、だからじゃない。体の中で血が巡っていく感覚がやけにリアルで、こんな勢いで回り続けられたら保たないという苦しさだった。

自分のなかで何かが弾けて体中を駆け巡り、外から何かを取りこむ余裕がなくなつたからだと、今はそう思う。冷静に分析出来てしまふほどに、あのときの衝撃は強烈にボクのなかに残り、今もふとした拍子に蘇るのだ。

「本当に、親切にどうもありがとうねえ」

「いえ、そんな」

深々と頭を下げるこの婦人の感謝ぶりに、かえつて恐縮してしまう。ケイちゃんが大学に行つてしまい、特にやることもなくなつてしまつたボクは、食材の買いだしのために外に出て、このこの婦人に会つた。

昨日やつて来たばかりの知らない町だったけど、大学周辺の地域とこれは学生が多く集まるだけあって、スーパーがそこかしこにある。まずは近所の地理に少しでも慣れようと、外に出てから最初に目に入ったスーパーに入った。

買い物かごを片手に、まずは店内を1周。入口付近に貼られているチラシに目を通し、本日のお買い得品をチェックすることも忘れない。とにかく、この辺りでは何がどれくらいの値段なのか把握しながら歩き回る。

ボクの住んでいるところよりも野菜が安いなあと感心していると、

ある一点でふと視線が止まつた。それが、このご婦人だ。

正確に言つと、ご婦人の持つていたカバンの取つ手部分に巻かれた、細い飾り紐。千代紙を連想させる和風のきれいな色どりのそれは、ケイちゃんが今朝の出掛けに持つて行つた鞄に巻かれていたものとよく似ていたのだ。

似てゐるつていうより、色違いなだけの、同じものなのかも知れない。ケイちゃんのは黄色が一番強く出ていたけど、ご婦人のは深い青色だつた。

ご婦人に、というより、その青い飾り紐に惹かれる形で、ボクは彼女が前を通り過ぎてもしばらく突つ立つたまま見つめていた。すると、ご婦人が唐突に転んだ。

障害物など何もなく、本当に「唐突に」という感じだつたから、一瞬、呆けたように動けなかつたけど、立ち上がろうとした彼女の肩が、痛みに震えるようにびくんと跳ねたのを合図に、ようやく金縛り状態が解けた。

「大丈夫ですか？」

駆け寄つて抱き起こす。予想していたよりもずっと軽い体は空洞を思わせ、転んだ拍子に骨が折れちゃつてもおかしくないと、本当にぞつとしたものだつた。

「ごめんなさいねえ、ごめんなさいねえ」

か細い声とは対照的に、上げた顔はとくに痛みを感じていなさうだつた。

「驚かせちゃつたわね、最近齡のせいか、なーんにもないとこひで
も転ぶようになつちやつて」

ボクを安心させようとしているのか、それともいつもこんな調子なのか、ご婦人はついさつきの派手な転倒が嘘みたいに、朗らかに笑つてゐる。

とりあえず大事にはならなかつたようで、ボクは小さく息をつく。彼女には悪いが、心臓にはもつと悪かったのだ。

放られた彼女の買い物がごからは、特売していた玉ねぎが「じるじる

と転がつていて、通行人が迷惑そうに避けていく。

「傷んでないといいんですけど。店に事情を説明して、商品、交換してもらいます?」

玉ねぎやらじやがいもやらを拾い集めながら、なんとか立ち上がった彼女に声をかける。

店側に責任がない場合って、交換してもらえるのかな、なんてことを考えながら拾っていたものだから、いざかごを渡そうと向き直つたところで彼女が深々と頭を下げ出したのには、ちょっと面喰つてしまつた。

そして、今に至るというわけだ。

「本当に、助かったわあ」

「や、そんな大層なこと、してないです」

ご婦人が頭を下げるたびに、登頂部分に濃く出た白髪がちらちらと目に残り、なんだか申し訳ない気がしてしまつ。老人を助けるなんて当たり前のことですから、なんてまさか言つわけにはいかない。

「それより、商品、このままでいいですか? 見た目は一応、大丈夫そうですが、長期の保存つてなると、傷んでると困りますよね」とにかく彼女のお辞儀の連発をやめてほしくて話題を変える。

特売の玉ねぎに、袋入りのじやがいも、土着きのにんじん。今日の献立はカレーだろうか、なんて、いらない詮索をしてしまつ。ケイちゃんとのプチ同棲も今日が初日だし、ボクもカレー作ろうかな。無難だし。

「いいえ、大丈夫。自分の責任で転んだんだもの。店側にこれ以上迷惑かけちゃ悪いわ」

柔らかな口調だけど、妙にきつぱりと言い切る彼女からは、さつきの大げさなまでのお辞儀も相まって、責任感の強いケイちゃんを連想させた。

そこまで連想が働くと、彼女にケイちゃんを重ねて見えてきてしまつて、余計なおせつかいを焼きたくなつてきてしまった。

「このかご、重いですよね。カート、持つて来ますね」

「いいえ、いいの。もうレジに行くところだし」

「この店まで、車か自転車で来ました？」

「いいえ、天気が良かつたから、歩きで」

「じゃあ、運びます。その、途中まで」

さすがにここまで行くとやりすぎなのはわかっていたけど、つい言つてしまつた。

ご婦人も驚いたようで、言葉に詰まつてこる。この世代ではまず使わない表現で言えば、「ひいている」というところだろうか。そりやそりやうだらう。たつた今会つたばかりの見知らぬ小娘から、家まで着いてきますなんて言われば、当然そんな反応になる。

でも、なんとなく、放つておけなかつたのだ。

彼女が持つカバンから、照明を受けた飾り紐が滑らかな光沢を放つ。深海を思わせる、深い青だつた。

まだボクがケイちゃんとちやんときょうだいだつた頃から、深い青はケイちゃんを思わせる色だつた。昔、そう思うに至つた思い出があるのだ。

だから、といつこにはあまりにも強引かもしれないけど、ボクはこのご婦人を放つておくのに、すくなく気が引けてしまつたのだ。

「困つたわ

彼女が力なくため息をついたことで思考は途切れ、自分の発言が、やつぱり物騒なこの時代にはとんでもなく非常識なことを思い出し、あわてて取り消そつとするのを遮るタイミングで、彼女がまた口を開く。

「いいお茶菓子が、ないのよ

「え？」

「こんなことなら、あのときやつぱりあの人に食べさせちゃうんじやなかつたわ。あの人つたら、あればあつただけ食べちゃうんだから。普段私が買つておくのは、そうよ、こんなときのためなのに」「話しに着いて行けないボクの前で彼女は一人大きく頷き、ようやくボクの方を向く。

「ちょっと付き合つてもらつてもいいかしら。このスーパーの隣にね、おいしいお菓子屋さんがあるのよ」

「はあ」

「あなたにお礼がしたいの。ぜひ、家に寄つて行ってちょうだい。そこのお菓子をご馳走させてほしいの」

自分で言つておきながら、本当に家まで着いて行くことになる流れに驚いた。ボクは野菜を拾い集めて渡しただけだ。わざわざお菓子を買ってもらうほどことはしていない。

でも、ここで招待を断るのはボクの申し出と矛盾するような気がして、とりあえず着いて行くことにした。ああ、なんかややこしい。

「本当に、親切に、どうもねえ」

家に案内してもらう道中も、彼女は言葉を少しずつ変えながらも、お礼を言い続けていた。

「いえ、本当に、大したことじゃないです」

ボクのこのセリフも、いつたい何度目になるんだろう。最近の老人というのは、みんなこんなに義理堅いんだろうか。普段大学生くらいしか接しないから、よくわからない。

ふいに、お礼の言葉が途切れ、沈黙が降りる。いよいよお礼の言い回しも尽きたのだろうか。

老人とも共有出来そうな話題を探しているうちに、さつきとは一コアンスの違う言葉をかけられた。

「そういえば、まだお名前を聞いていなかつたわ。教えてくださる

？」

「あ、ボク、見原忍つて言います」

一人称は、間違えたわけではない。普段は仲の良い人たち以外には「私」という一人称をちゃんと使つている。

まあいいか、と思ったのだ。こつちに来てからはまだケイちゃんとしか話していないから、「ボク」という一人称しか使つていない。いちいち使い分けるのも面倒な気がしたのだ。それに、変に思われようと、もう会うこともないだろうし。

そんな軽い気持ちで使つただけに、『ご婦人が立ち止まってボクを食い入る』ように見つめてきたのには驚いた。まるで幽霊でも見たかのようだ。驚きのあまりに顔が青ざめている。転んだときは平氣だつたのに、そんなに驚くよつたことだらうか。

「すみません、やつぱり女なのに自分のこと『ボク』つて言つの、変ですよね」

あわてて弁解するボクを見る彼女の眼は驚きで見開かれてはいるものの、嫌惡の色がないことに気付いた。

「あら、『ごめんなさいね』こんなに過剰に反応しちやつて。失礼よね。本当に、『ごめんなさい』」

この調子だと、今度は『ごめんなさい』合戦になりそうだと身構えたものの、ご婦人から出てきた言葉は予想していないものだつた。

「孫娘もね、自分のことボクつて言つてたのよ」

少し震えた声だつた。ほんの少しの懐かしさと、とつもない悲しみが染み出た、切ない声だつた。

「お孫さんと、最近は会つていなんですか」「もう会えないの」

彼女のなかが空洞みたいに感じた、やつきの軽さを思い出した。それだけ、声はうつろに響いた。

「とても遠いところに、行つてしまつたのよ」

どこからかパートカーのサイレンが聞こえてくる。

「いやあね。この辺も最近、物騒なのよ」

スーパーで会つたさつきまでのよつて、彼女はまたのんびりとした口調に戻る。

「忍さんが『ボク』つて言つのには、何か理由があるのかしら?」「えつ」

「ふふ、ちょっとした好奇心。よければ教えてほしいつてだけの軽い気持ちだから、嫌だつたら言わなくていいのよ」

さつき聞いた「孫娘」の存在感がまだ色濃く残つていただけに不用意なことは言えないと身構えたものの、彼女の表情も、すでに柔ら

かいものに戻っていた。

ボクは言葉を選びながら、少しずつ説明していく。

「なんとなく、自分が女の子って感じがしないんです」

昔からそうだった。可愛い服を着て、あの男の子がかっこいいとか好きだとか、そういう女の子たちとボク自身が同じ人種というのが、どうもしつくりこなかつたのだ。

わたし、とか、あたし、とか連呼する抵抗は小学生になつてもなくならなかつた。

父さんが、正確に言えばケイちゃんのお父さんが、「ボク」と使つている響きが一番自分に合つているような気がして、「じく自然に、ボクは「ボク」と言つようになった。

周りがそれを容認してくれたわけではない。

ショートカットにしていようと、スカートを決して穿いていなかろうと、ボクの性別が女子であることに変わりはないからだ。

「べつに、自分が男子だと思ってるわけじゃないんです。女子に生まれたことを恨んでるわけでもないです。ただ、男子と女子に一分されると、すごく窮屈なんです」

そこにボクの居場所がないから、と言えば、ひどく陳腐な気がした。自分は他人とは違う。まるで、そんな身の程知らずなことを言いたいみたいで、すごく恥ずかしい。

なのに、そんな傲慢な言葉が、皮肉なことにボクのジレンマに一番近かつた。

自分はいったい、何ものなのか？

この言葉に出会つたのは、そんなジレンマの解消を諦めつつあつた、高校時代のことだった。

いかつい顔をした肖像が隣に映り、ボクでない誰かを、あるいは何かを、強く見つめている。教科書の1ページとしては、べつに奇天烈なことでもなんでもなかつた。

でも、ボクはその言葉に射抜かれた。大げさな表現ではないつもりだ。

ボクは、これを知りたかったのか。

体中を駆け抜けた「何か」は、ずっと知りたかった「答え」ではなかつた。

「問題文」だつたのだ。ボクは数年前にようやく、物心ついた頃から常に気配を感じていたものの正体を知つたのだ。

「自分だけの形が、ずっと欲しかつたんです。『ボク』って呼び方がそれに当たるわけではないんですけど、少なくとも持つているボキヤブライーの中では一番、窮屈じやないんです」

言えば言ひほど、ボクが持てあましている焦燥から離れていく気がした。

個性豊かつて言葉ほど無個性なものはない。痛感した。
人と違う存在になりたいから、ちょっとと変わつた呼び方で注目されたい、自分を誇示したい。ボクの言葉じや、こんなところだらう。じれつたのに、ちゃんとした言葉が出てこない。

「わかつてほしいんです。その他大勢じやない、ボク自身をちゃん
と、伝えたい。それだけのことなんです」

「ご婦人はボクの言葉に共感出来るところなんて一つもないはずな
に、黙つて聞き続けてくれた。

今度は救急車のサイレンが聞こえてくる。さつきのパトカーのサイ
レンよりも、ずっと近い場所みたいだ。

「この辺、本当に物騒なんですね」

明るい声を出して、さつきのむなしいスピーチを払拭してしまった
かつた。

「そうね」

「ご婦人は穏やかに答えた。

「でも、いいことだと思わない?」

「物騒なことが、ですか?」

さつきから薄々感じ取つていたけど、このご婦人は、いちいちボク
の予想出来ないとこに会話を打ち返してくる。

「そうじやなくて」

「婦人は楽しそうに笑う。

「こうしてサイレンが鳴るつてことは、助けに来てくれる誰かがちゃんといるってこと。ＳＯＳの声を聞き漏らさずに駆けつけてくれる人がいるってことだもの。大事なことだと思わない？」改めて彼女の横顔を見てしまった。穏やかではあるけど、何を考えているのか、何を伝えようとしているのか、まるで窺うことが出来ない。

「ちゃんといるのよね、声を聞き届けてくれる人が」耳をすませた。

サイレンの音は、いつの間にか消えていた。

「もう一度、鳴りますかね」

「鳴るわ。きっとね」

やしてサイレンは鳴る（後書き）

かつてない長さになってしまった。ここまで来てくださった方、本当にお疲れ様でした。では、次回も来てくださいることを願つて、また。

夏休みを前に（前書き）

今回は姉・恵の一人称です。

「人間、過去に縛られてしまつ」とほど悲しいことはないと思わない？」

千佳のやけに力の入つた演説を目の前にして、私は無言でアイスティーを口に含む。

「過ぎてしまつたことは、もうどうやつても取り消せやしないわ。大事なのはこれからをどう生きていいくか。そうよね？」

1対1で向かい合つて座つてしているだけに、この問いかけを投げられたのは私であると判断するのが妥当なんだろうけど、私はやはり何も言わず、口に含んだアイスティーを飲み込む。

「これからとはすなわち夏休み。大学生時代は人生の夏休みとはよく言つたものね。そして、今日、この瞬間からは夏休み中の夏休みということよ！」

日本語としてそれはどうなのかなあと思いつつも、私はやはり黙つてストローでグラスの中身をかき回す。

「さあ、恵。私の言いたいことがわかるかしら！」

「テストは撃沈状態だつたけど、今さらどう足搔いたところで無駄だから、きれいさっぱり忘れて夏休みを遊び倒して楽しもう、ってところ、かな」

「・・・ふふ、事実がいつも正解とは限らないわね」

千佳はよくわからぬことを言つて、ようやく自分のアイスコーヒーを一口飲む。さつきから喋りどおりでまともに飲んでいなかつたから、グラスにはまだ並々とコーヒーが残つている。

テスト明けの気晴らしにと千佳に誘われ、大学からちょっと足を延ばしたおしゃれな喫茶店に入った。

普段は大学の学食くらいでしか外食をしない貧乏学生の私にとっては慣れない贅沢でちょっと場違いのような気すらしていたけど、目の前に千佳を座らせると途端にそんな高級感も失せた。こういうの

をムードメーカーというのだらうか。どちらかといえばムードブレー
カーの方がしつくりくる。

「で、恵は夏休み、いつ遊べる?」

「んー。8月中はほとんどバイト入れちゃったからなあ

「ちょっと、大学生は遊んでこそナンボでしょうが。その時間を売
り飛ばすだなんて、あんまり感心しないわね」

「逆。時間をお金に替えられるのなんて今のうちだから、今や
らなくちゃ」

「マジメつていうのも、ここまで来るとなんか不憫だね・・・」

千佳はようやく少しテンションを下げてアイスコーヒーをすすりだ
す。

「恵

「ん?」

千佳の声の調子が変わったのに気づられてアイスティーから顔を上げ
る。やけに真剣な表情と視線がぶつかる。

「今年はさ、もっと楽しもうよ。いろいろと

「いろいろして・・・」

「海行つたりさ、バーベキューしたりさ、今日みたいにお茶したり
だよ。去年、恵ちつともそういうのに乗つてこなかつたじゃん。も
つたいないし、第一さびしこよ、私」

いつものように変に高いテンションじゃないだけに、千佳が本心か
ら言つてくれているのが伝わつて来て、私は言葉に詰まつてしまう。
千佳と知り合つたのは大学に入つてからすぐで、それ以来今もこう
してテスト明けの気晴らしに誘つてくれる仲のままだ。

大学に入るといろんな人と出会つ。授業、バイト、サークル。同期
もいるし先輩もいるし、2年生になつてからは後輩という出会いも
増えた。

携帯のメモリーにどんどんデータが書きこまれていつて、いつでも

連絡の取れる相手はこの1・2年でぐんと増えた。

でも、連絡を取りたいと思える相手は、人見知りの私には少ない。

アドレスを交換したきり一度もメールをしたことのない相手が大半なのだ。数少ない例外が、千佳なのだ。

「ありがとう。また千佳の都合のいいときに誘つてよ」

「私の都合のいいときについて・・・」

「千佳、サークルで今年から面倒な役員になつたんでしょう？テスト前だつていうのに、忙しそうだったもんね。それに、私と違つて千佳は友だちも多いし、いろいろ予定もあるんでしょ？千佳の空いてる時間から計画練つた方が効率的だよ、うん」

私の言葉に、千佳は「やれやれ」といいたげに大きくため息をつく。

「あのね、恵。あんたから私を誘う義務があるの、忘れてるでしょ

う

「義務？」

「そう、義務。暇だなあとか誰かに会いたいなあととかそういうとき、恵は私を頼る義務があります」

口の形は笑つていて、千佳の目は真剣なままだ。

「私さ、恵のこと、けつこう大事に思つてるつもりなの。私にとつて自分のこと何番手だと思つてるのか知らないけどさ、振りまわすくらいの気持ちでいてもらわなきゃ、かえつてヤだと思つくらいの場所にいるわけ。わかる？」

何も言えなかつた。普段のおちゃらけた千佳がそんなことを言つたら？

違う。

私は今まで、こんなことを言われたことはなかつたから。

「恵つていつも自分のこと、過小評価つていうの？低く見すぎ。優先順位とか、そういう配慮はつざい。私はあんたと遊びたいし、一緒にいろいろな思い出つくりたいって思つてんの。あんたは私の友だちでしょ？私のこの気持ちを尊重する義務がある。そうでし

よ？」

「・・・横暴じゃない？」

「今さら気付いたの？私は横暴でわがままなのよ。あきらめなさい

私はアイスティーを飲むためを装つて、千佳から目を逸らす。このまま千佳を見つめていたら、誤解してしまいそうだ。

千佳はべつに私とじやなくともいいはずだ。

千佳にはたくさん友だちがいるし、今たまたま千佳の前にいるのが私だつたからこいつ言つてくれてているけど、本当は私の代わりなんていくらでもいる。

私にとって千佳が数少ない例外だつたとしても、千佳にとつてはそうじやない。たくさんいるなかの、一人でしかない。それを忘れちゃダメだ。

私は、つまらない人間だから。

10年前のあの日から住み着いたこの劣等感は、消えない。だから、私は千佳に頷いてみせたものの、自分から連絡を取ることはないだろうなと思った。

千佳は過去に縛られてしまうことほど悲しいことはないと言つた。

それなら、私は千佳の言つ、悲しい人間だ。

人生の夏休み。

私は、これを楽しむ権利なんて、あの日から持つていやしないのだから。

夏休みを前に（後書き）

お疲れさまでした。ありがとうございました。

絵の具とケーキと百日草（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

五感のなかで一番記憶に残りやすいのは、「嗅覚」だそうだ。顔の一番高いところにある鼻は、もともと状況に応じた匂いをかぎ分けて記憶し、危機回避することに意義がある。腐ったものを食べて食中毒で死んでしまう、なんて悲しい絶滅を人類が辿らなかつたゆえんも、嗅覚がちゃんと働いてくれているおかげなのだ。だからといってこんなことを言われたら、誰だつて驚いてしまつんじゃないだろうか。

「君からは、なんだか懐かしい匂いがするよ」

成り行きで家まで着いてしまつた先で最初に言われた言葉がこれだつた。しかも、相手は初対面のおじいさんである。

「あなた、そんなこと急に言われたら忍さんが困つてしまつわ」ボクの足元にスリッパを並べながら、婦人が助け舟を出してくれる。事実、ボクはけつこう困つていた。勢いで着いてしまつたうえに招き入れられてしまつたのでは、いたたまれなさすぎる。

「あの、荷物も運び終わりましたし、帰ります」

玄関口で回れ右しようするボクを、老夫婦はやんわりと引き戻す。「あら、忍さんが帰つてしまつたら、はりきつてたくさん買つてしまつた」のお茶菓子はどうなつてしまつのかしら」

「ほつ、忍さんというのか。なに、心配はいらないさ。荷物をわざわざここまで運んでぐだぐだするような親切な方が、まさかこんなにたくさんのお茶菓子を腐らせるよつたむ」といことを、老人2人にさせるわけないじやないか

「ホント、そのとおりねえ」

いたたまれなくなつてまた振り返つてみると、口元に口と笑つ老夫婦と目が合つ。

「・・・お忙しいところをお邪魔するわけにはさせんので」

最後の抵抗とばかりに小声で言つてみるものの、「」婦はばつせりと

切って捨てる。

「昼間から、このとおり夫がのこの出でくるような家よ。忙しい
なんて言葉、とっくに使わなくなってしまったわ」

ボクは観念してスリッパを借りた。

通された部屋は老夫婦の一人暮らしにふさわしい、どこか温かみのあるものだった。

老人というとなぜか畳とちやぶ台を連想してしまって、床はフローリングだし机はどうしりとかまえた大きなものだった。

「かわいいですね、この花」

テーブルの中央で花瓶に生けられたカラフルな花につい魅入ってしまつ。

丸みのある花びらが何枚も折り重なつて、まさに「てんこもり」という感じだ。赤や黄色、紫、いろんな色がある。

「あり、忍さんは花が好きなの？」

「あ、はい。好きというか

この花はどこかで見た覚えがある。そんな気がして気になつてしまつた。

いや、花だつたらどこで見かけても全然、不思議じゃないんだけど。自分のなかで「これはけつこう、大事なことなんじゃないの？」とせつつかれているみたいで、思い出せないことがちょっともどかしい。

「これは百日草と言つてね。夏の花で、うちの庭で咲いたものなんだ」

ボクの向かい側に座つた老人が花の位置をちょいちょいと指で直しながら教えてくれる。その仕草がなんだかかわいらしい。白髪一色の外見に反して、ずいぶん若々しい・・・というより年頃の乙女のような可憐さを感じさせた。

そんなことを考えていただけに、急に正面から見つめられて頭を下

げられたときは驚いた。

「忍さんといつたね？妻の悦子を助けてくれて、本当にありがとうございました」「いや、ですから、本当に大したことではないんで」

「あら、ずいぶん大したことよ？」

悦子さんといつらしいご婦人は和風のお盆に華奢な洋風のティーセットを乗せた、なんともミスマッチな組み合わせを持つて台所から出てきて言う。

「スーパーにはけつこう人がいたのに、材料を拾い上げてくれたのも私を助け起こしてくれたのも、忍さん一人だけだったもの」

「うん、やっぱりそれは大したことだね」

悦子さんも旦那さんもうんうんと頷き、ボクを見てにこりと笑う。ボクは苦笑いをして目を逸らす。

この老夫婦一人は、人が良すぎる。

普通、たかが助け起こしてもらつただけで見ず知らずの小娘を家に上げるだろうか？いや、まあボク自身が着いて行くと言いだしたのがそもそももの間違いだつたんだろうけど、それでもこうしてお茶やお菓子をふるまってくれるのはやりすぎだと思つ。老人つて、みんなこんなに人がいいんだろうか？だから呆気なく降りこめ詐欺に騙されてしまうんだろうか？

「忍さん？」

悦子さんの言葉で我に帰る。

「どうしたの？ずいぶん思い悩んだ顔をしていたけど」

思わず頬に手をやる。急いで口角を上げて笑顔を作る。つい今までと同じ、ひきつったものになってしまつただろうけど。

「すみません、えーと、その、こんなにおいしそうなお菓子を食べることつて滅多ないので、緊張しちゃって」

今しがた悦子さんに出してもらった、きれいな色びりのケーキを指す。

「学生だと、なかなか自炊に精一杯でこんなにおいしそうなケーキを買う余裕がないというか」

「あら、忍さんは、大学生くらいだとは思つてたけど、一人暮しだつたのね。この辺の大学？」

「いえ、今は夏休みなので遊びに来ているだけなんです」

「専攻は何？あつ、待つて。当ててみるから」

楽しそうな悦子さんの隣で、旦那さんはお茶を一口すすつた後に断言する。

「忍さんは、美大生だね？」

「えつ」

「あら、当たりなの？ダメじゃないあなた。私、まだ考えているところだつたのに」

「こういうのは早い者勝ちなんだよ」

「大人げないこと言うのね。まるで子どもだわ」

「君と同じ年だよ。嬉しい」とね

「あの、どうしてわかつたんですか？」

盛り上がつてゐる二人に水を差すのは気が引けたけど、これはどうしても聞いておきたかった。

美大生というのは、それとないオーラを放つてゐると聞いたことがある。同じ大学に通う先輩が偉そうに言つてゐた言葉だ。

ボクにもそういう貴祿が備わつて來たということなんだろうか？

しかし、旦那さんの言葉はボクの期待とはまったく違つものだつた。

「匂いだよ。絵の具の匂いがするんだ、忍さんから」

匂い。自分の匂いを嗅ごうとして、さすがに躊躇われる。人前なのだ、一応。

「ひょつとしてさつとき言つていた懐かしい匂いというのは・・・」

「うん、これでも僕は昔教師をやつていてね。いつもいた教室の隣が美術室だつたから、絵の具の匂いというのは僕の教師時代のシンボルもあるんだ。形がないからシンボルつていうのもおかしいのかもしれないけど」

昔のことを思い出したのか、楽しそうに笑う旦那さんを前に、思つて了一より自分が落ち込んでいることに気がつく。

「あらあら忍さん、匂いつていつても、私だって言われて今氣付いたくらいだから、べつにそんなに強く匂つているわけじゃないのよ」
悦子さんはおろおろとフォローを入れてくれる。おかげた、ボクが
絵の臭いと言われて落ち込んでいると思つたのだろう。あいにく、
ボクにそんな女の子らしい憂いは湧いてこなかつたのだけど。
「違うんです。そういうことじやなくて」

笑つて弁解しようとする。

ホントに人がいいな、この一人は。

なんでそんなに心配そうな顔をしているんだろう。ボクはべつに、
気にしてなんかいないのに。

「たしかに美大生なんですけど、最近ちょっとスランプつていうか、
自信をなくしちゃつて」

絵を描くことが好きで、自分にはこの道しかないと信じて進んでき
たはずなのに、最近頭に浮かぶのはこの言葉ばかりだ。

どうして美大生になんてなつちゃつたんだろう?

美大には絵のうまい人なんていくらでもいて、入学早々にボクのさ
さやかな自尊心はあつさり、あまりにも呆気なく碎かれてしまつた。
それでも好きだからこそ続けてきたんだという根本的な気持ちだけ
は捨てていなければいけないつもりだった。

「自分が、わからなくなつちゃつたんです。個性が何よりも大事な
世界なのに、誰かの真似をしているような気がしてしまうんです。
そうなるともう、何を描いたらいいのか、描きたいと思つてきたの
はどうしてだつたのかすら、わからなくなつてしまつて」
言いながらどんどん惨めになつてきて、笑つて誤魔化す。

そういうところがダメなんだろうなあと思いつながらも、ボクは結局
笑つて問題から目を逸らさないともつとダメになつてしまつ、どう
しようもない人間なんだろう。

「最近は絵の具なんて絞り出してないから、当てられたのはすごい
と思います。やっぱり、けつこう強く染みつっちゃうんですね、絵
の具つて」

悦子さんは悲しそうに頭を伏せたけど、旦那さんは変わらず、穏やかな表情のまま、予想していなかつたことを言いだした。

「それなら、僕に絵を教えてくれないかい？定年になつたら絵画にチャレンジしてみたいと思つていたんだよ」

思わずまじまじと旦那さんののんびりした顔を見つめてしまつ。この人、人の話を聞いていたんだろうか？ボク、今、自信をなくして言つたよね？なのに、なんで先生のまね」とみたいなことを提案してくるんだ？

「あの、そういうことばこんな学生のひよつこではなく、地域の交流会や通販力タログなんかを利用した方がずっと実になると思いますけど」

「あなた、忍さんは忙しいのよ。大学生なんて、夏休みはそれこそいろいろやることがあるんでしょう？課題とか研究とか、忙しいんじゃない？」

「いえ、課題とかはあまりなくて・・・遊びに来たものの、今後の予定とかはまったく考えてなくて」

正直に話した途端、悦子さんの頭がきらりと光つたような気がした。何か言ひ前に悦子さんの手が返る。

「あら、そういうことならまたつちに来てもらいましょうよ。お礼としてまたおいしいケーキをじこ馳走できるわ。あなた、画材くらいは持つてるんでしょ？」

「うん。これから買い物に行ひこと思つんだ。先生が決まつたとなると、急に現実味が出てきたよ。楽しみだなあ」

「そうよ、忍さんは先生なのよ。ちゃんと先生つて呼んでね」

「いいね、先生か。なんだか定年前に戻つた氣がするよ。まあ、今度は僕が生徒なんだけど。先生と呼ぶのなんて半世紀ぶりかな？すじく若返つた氣がする」

「それはいいことね。あなた、最近やることもなくてずいぶん元気をなくしていたものねえ」

「うん、いい生きがいができたよ」

ボクを差し置いてどんどん進んでいく話に、もはや口を出すことは出来なくなってしまった。だって、今断つたら田那さんを早死にさせたいみたいじゃないか。

「でも、忍さんの意志が一番大事よね。『めんなさいね、一人で浮かれてしまって』

悦子さんがようやくボクに発言権をくれる。

助かったとばかりに断りつとするボクに、悦子さんはにっこり笑つて言う。

「お礼のケーキ、何がいいかしら？ チーズケーキでもミルフィーユでも、なんでも好きなものを言ってね」

「え？」

「そうだね、うん。先生の意志をちゃんと聞いておかないとね」顔を見合わせてまたもやにっこりと笑う老夫婦に、ボクの答えは一つしか用意されていないことをようやく悟る。

「それじゃ・・・一番安いやつ、お願ひします」

百戦錬磨の老人に、ひょっこりの小娘が敵うわけないのだ、最初から。

絵の具とケーキと畠田草（後書き）

お疲れ様でした。ありがとうございました。ちなみに、畠田草の花言葉は今後使うキーワードなので、「この話、ぐだぐだだけど、ちゃんとプロ仕事は出来るのか?」と思われた方は見てみてください。この話の筋は、その花言葉に準じるものにしておこうと思つています。

BGMは穏やかに（前書き）

今回は姉・恵の一人称です。

労働は人間の責務だといつ。

だから、というわけではないけれど、私がアルバイトをしていることもそんなに不自然なことではないと思う。

「お疲れ様でーす」

物置を兼ねた狭つ苦しい更衣室から出た私は調理の人たちにいつものように挨拶をする。

今日は大して予約が入っていないのか、調理の人たちの下「」しらえの様子もどこかのんびりとしている。でも私の挨拶の返事が返ってくるわけではない。いつものことだから特にきにしたりはせず、私は自分の仕事を始めるために厨房を出て店内へと向かう。

私がバイトをしている店は夕方からだいたい日付が変わるもので開いている小さな居酒屋で、平日は基本的に閑古鳥が始終鳴いている。個人営業のお店だからチーン店のように正社員がバイトを引っ張つていくという力関係もなく、驚いたことにホール、つまり注文を取つたり料理を運んだりするといった、直接お客様と関わる仕事はすべて私たち学生のアルバイトで構成されている。これには初めてのうちはとても驚いた。

「おはよう、ケイちゃん。今日も早いね」

「おはようございます、リングダさん」

夕方であっても、この店では最初の挨拶は必ず「おはよう」ということになつていて。これにも驚いたけど、そもそも夕方からしか開かないお店だから、ある意味自然な習慣なのかもしれない。夕方に使う挨拶というのは日本語にはないし、「こんにちは」というのは親しい間柄ではほとんど使われない。

リングダさんは腰のあたりをトントンと叩いてから「今日も絶対、暇だよね」と呟き、台拭くための雑巾を取りに行く。

私は苦笑いをしてその後ろ姿をほんの少しだけ見送る。

リンダさん、というのは私の4つ上の女の先輩で、今は大学院生だ。本名は林田さんという立派な和名があるのに、昔そんな歌手がいたという理由であつたり音読みされた名字で定着してしまったらしい。「まあ、いいんじやない」とどりでもよさそうに受け入れてしまう。リンダさんの昔が目に浮かぶ。リンダさんは、良く言えばクールで、正直に言えばいろんなことに無頓着だ。

シフトの都合上、私は大抵リンダさんと一緒に働いている。小さい店だし、第一暇なので二人しかホールがいなくても店は回る。本日のおすすめが書かれた黒板の日付を書き換えたり、テーブルを拭いたりと、たとえお客様さんがほとんど来ないことがわかつていてもホールの仕事はそれなりにある。

各テーブルの端の方に置かれた調味料や割り箸なんかの補充をやっているうちに、開店してから1時間はすぐに経つてしまう。それでも依然としてお客様さんは一人も来ない。いつも通りのこととはいえないや、いつも通りのことだからこそ、この店は本当に大丈夫なのかと毎回不安になってしまつ。

「やつぱり、今日も暇だねえ」

私の隣に来て、玄関からいつお客様さんが来てもいいこと見張りつつ、リンダさんはのんびりと言つ。

「まだわかりませんよ。これからドカッとお客様さんが来るかも」自分でも信じていたわけではないけど、安易に同調するのも後ろめたくて、とりあえず口では店が決して流行つていないと認めずにおく。

「んー、そりや絶対来ないことはないけどわあ。なにせ、冴えない店だからね」

「冴えない、ですか」

私は照明が抑えてある、見ようによつてはちょっと薄暗い店内を見渡して考える。

BGMは物静かなクラシックで、「静かに穏やかにお酒を飲める店なんですよ」とアピールしているようにもれる。実際、静かで穏

やかにお酒を飲めるのは確かだ。ガラガラだから。

「やっぱりこいつ、もうちょっと賑やかな音楽とかにした方が、居酒屋つて感じがするから、ですか？」

「うーん、まあそれはそうなんだけど。もつと大きな理由としてさ、この店、値段が高いじゃない」

ああ、と、今度はすんなり頷けた。

貧乏学生の私だけがそう思っていたんだろうかと今まで言葉にして認めたことはなかったけど、やっぱり普通の感覚として「お高い」んだ。

「高いわりには、特に他の店にはないような変わった料理を出すわけでもないし。ちょっと背伸びしてるくせにホールは全員学生のバイトだし。中途半端つていうか、背伸びしそぎなんだよ」

リンダさんは飄々とそんなことを言つてのけるけど、私は店長に聞かれていやしないかとかなりヒヤヒヤした。一応、私たちには雇われの身なのだ。

私の狼狽ぶりを見たリンダさんはおかしそうに笑う。

「ケイちゃんつてば、ホントにマジメだよね。いいじゃん、私たちどうせしがないバイトなんだから。クビになつたからつて生活に困るわけじゃないんだからさ、そんなにおどおどしないでよ」

「いや、クビになつたら困りますよ、やつぱり」

「もつと条件いいところに雇つてもらうのもアリだと想つよ。私はもう院生だけど、ケイちゃんはまだ2年生でしょ？ 20歳なんて、若いなあ」

「まだ19歳です」

年齢を若い方に訂正するなんて、我ながらおばさんくさいなあと思いいながらも言わずにいられなかつた。私はもつと若くないのかもしない。

「へえ。まだ未成年かあ。誕生日、いつ？」

「8月31日です」

「あ、じゃあ今月末なんだ。なんか、夏休み最終日が誕生日って複

雑じゃない？ 大学は9月も休みだけど、今まで8月で休みも終わりだつたんでしょ？」

「それ、よく言われます」

夏休み最終日に私は一つ年をとる。

クリスマスに誕生日だという子が小学生のときのクラスメイトにて、プレゼントが合併されて嫌だとかそんな話をしていたから、私の場合はそんなに嘆くような日付ではないと自覚しているつもりだけど、やっぱりちょっと損をしているような気は今でもしている。

「明日から学校かあ」とため息をつきながらも、やっぱり自分の誕生日は特別な日のような気がして、そわそわしてしまつ。毎年のことだ。

私にとっては夏休みの終わりであり、一つ年をとつた自分の始まりでもあるのだ。

「いいよねえ、ケイちゃんは。まだまだこれからじゃん？ 私なんて来年から社会人だよ。夏休みなんてどうせ3日くらいしかとれないだろうし、第一年取つたなあって思っちゃう」

リンダさんはまた腰をとんとんと叩く。

「腰、痛いんですか」

「んー、特に力仕事してるつてわけでもないんだけどねー。やっぱり年だよ、やだなあ」

年だと連呼するリンダさんだけど、私の4つ差だからまだ23くらいのはずだ。腰痛を患うような老人の年では、断じてない。

「何言つてるんですか。リンダさん、まだ全然若いじゃないですか」さつき自分を「おばさんくさい」とか「若くないのかもしけれない」なんて評価しておきながら、私は年上のリンダさんを必死にフォローしていた。我ながら調子がいいもんだと呆れてしまう。

「ケイちゃんにはまだわかんないかもしれないけどさ、20になつてからが速いんだよ、時間が過ぎていくのが。ホント、驚くくらいに。私だってついこの間成人式やつたはずなのに、いつの間にか後輩がその立場になつてるんだもんなあ」

「私は成人式まだですから、大丈夫ですよ」

私はいつたい何に対してものフォローなのか自分でもわからなくなりながらも調子を合せて口を動かす。

「リングダさんは必死になつてゐる私を見てふつと笑う。

「何か、やつておきたいこととかないの？」

「やつておきたいこと、ですか」

「10代最後の夏なんですよ。ノルマつて言つのも変なのかもしないけど、目標みたいなものはあるの？」

ま、私は特になかつたけどー、とリングダさんはおどけてからまた力なく笑う。

「なんか、私にとつてはけつこう感慨深かつたからさ。10代と20代つて、全然違うつて。大人になるつて感じ？お酒もOK、法律上はもう大人。大学に入るまでは20歳になる頃には何もかも変ると思つてたくらい」

青臭い考えだよねえと笑うリングダさんを、思わずまじまじと見つめてしまつた。

腰が痛いリングダさん。バイト先の欠点を平氣で言えちゃうリングダさん。青臭いと思うことを後輩の前で暴露してしまえるリングダさん。大人つて、なんだろう。

考えたことがなかつたわけじゃない。むしろ、幼いときはよく考えてきたテーマだと思う。

でも、改めて疑問に思つてしまつのだ。

成長するつて、どういうことなんだろう、と。

「何かやらなくちゃいけないような気は、なんとなく、しているんです」

私はリングダさんがそうして「るよ」に、玄関の方を向いて小さな声で話す。

「サークルで思い出作るとか、友だちと何でもないことで盛り上がるとか、花火をするとか、バイトでたくさん稼ぐとか、たぶん、そういうこととじゃないんです。自分でも、うまく説明出来ないんです

けど

BGMがやけに鮮明に聞こえる。そつか、ここは静かな店なんだっけ。静かで穏やかで、冴えないお店。

私にぴったりじゃないか。

バイトに来る前に会つた千佳のことを思い出す。

今年はもつと、たくさん遊んで思い出を作つ。そう言つていたんだっけ。

私はそのとき、何を思つた？

千佳に自分から連絡することはないだろうなと思つた。

どうして？それは、私と千佳はつりあわないと思つたからだ。いつも感じている。気付かないフリをしているだけで。

自問自答の不毛さに、呆れた。それでも思考は止まらない。

千佳がバイトを始めるなら、きっとBGMが賑やかな店にするだろう。

値段が高いだけで何の特徴もなく、変に背伸びをした中途半端なこんな店ではなく、もつとお客様さんがたくさん来る、おしゃれで繁盛している店にするだろ？千佳には、それが似合つてこない。あまりにも混みすぎててんてこ舞いで、「もつと空いていたらなあと繁盛ぶりを恨むだろ？暇だと連呼するしかない店があることを想像することすらないだろ？」

「20歳になつても、結局私自身、大して大人になれるような気がしないからかもしれません」

今度は私が笑つてみせた。リンダさんのように飄々と欠点を言えちゃうような思い切りの良さを、それで少しでも真似た気分になりたかつた。

「大人になつたら、もう少し自分を好きになれるんですかね」

「ケイちゃんは自分のこと、嫌いなの？」

「好きではないです」

「どうして？」

「……」

「……」

卑屈になつてゐるつもりはなかつた。事実をちゃんと冷静に捉えている自信はあつた。

私は、つまらない人間だ。それを笑つて誤魔化せたつもりになつてしまえるほどに。

リンダさんは前を向いたままだつた。お密さんが来る気配は今もない。

「よし、じゃ、いりしょつ」

「ういぶん長い沈黙のあと、リンダさんは急に言つた。

「ケイちゃんの、20代になるまでの田標。自分に自信を持てるようになること」

「田標、ですか」

「うん。ないよりはあつた方がいいでしょ。夏休みは、まだ始まつたばかりだからさ、いろんな経験しなよ。それで、私は大人だつて断言出来るよつになつちゃいな」

「先輩、それ、すこーく他人事みたいに聞こえるんですけど「そりや そりだよ。自分のことではないし。うん、他人事。でも、出来るといいね」

歯切れよく、楽しそうに言つコンダさんの横顔をちらつと見てから、また正面に視線を戻す。

「大人になるほどの経験つて、いつたいどんなもんなんですか」

「それは、まあいろいろだよ」

「私、8月はほとんどバイト入れちゃいましたよ」

「バイトを言い訳にしない。社会勉強だと思つて、しつかり働きましょう」

ケイちゃんはいつも頑張つてるけど、と付け加えるリンダさんの横顔は若々しいものだつた。腰が痛いと年寄り臭いことを言つている人のそれではなかつた。

人を褒められる人は、自分に自信のある人だと思つ。

自分にちゃんと誇れる部分があるから、他人を見ても搖るがないでいられるのだと、リンダさんを見るとそう思わずにはいられない。

「やつぱり、リンダさんは若いですよ」

「どうしたの、改まって。何も出ないよー」

「若いんですけど、でも私よりずっと大人ですね」

リンダさんには、やつぱりこの店はふさわしくないですよ。そういう思

つたけど、言わないでおいた。

お密さんは、やつぱり来ない。

おつかさなめでした。あつがとうございました。

ほんまだよ（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

時間といつのは一人ぼっちの人間の傍に長くいたがるものなのかも
しれない。

同情のつもりなのか知らないけど、はつきり言えばそれはいい迷惑
だ。

一人の時間を長く過ごさなくちゃならないのは、やっぱり良い気は
しない。

「おかえりケイちゃん。遅かったね」

呼び鈴を鳴らさず、自分で鍵を回して家に入つて来たケイちゃんを、
ボクは笑顔で出迎える。

「カレー作ったんだけど、食べる？」

ケイちゃんはようやく自分の家に居候が来ていたことを思い出した
よつで、少し間を置いてから「ああ」と息を漏らす。

「バイトでは賄いが出るの。言つてなかつたっけ」

「えつ、じゃあ、もう食べてきちゃつたんだ」

「うん。つていうか、さすがにこんな時間には食べないよ」

本棚の上に置かれたアナログ時計を見る。もつ日付を回つていた。

「バイトって、こんなに遅くなるんだね・・・」

「まあ、居酒屋だしね。そのぶん時給はいいから、文句は言えない」
ケイちゃんは面倒くさそうにそう言つて肩から鞄を下ろし、自分も
座り込む。

狭い部屋だから、一人増えただけでお互いの存在感がすく大きく
感じられる。そのぶん、なんだか沈黙が痛い。

「居酒屋でバイトしてるんだね。なんていうお店なの?ボク、今度
行つてみようかな」

「高い店だから、学生には向かないよ」

「へえ、高級なお店なんだ。やっぱりその辺のお店じゃ食べられな
いよつね」いものを出してるんでしょ?そんなすここところで働

いてるなんて、ケイちゃんはすごいね」

やたらと「すごい」を連発して褒めたつもりだったのに、ケイちゃんは照れた様子もなく、不機嫌に黙り込む。何か気に障るようなことを言つただろうか？

ひょっとしたら、バイト先で何か失敗をしてしまつて、今はバイト関連は禁句なのかもしない。だからボクは急いで話題を変える。

「あ、明日はバイト、ないよね？ボクが料理作るから、何でも好きなもののリクエストしてよ」

「明日もバイトあるの。つていつか、8月はほとんどの日数をバイトに割いてるから」

素つ気なく言つてからケイちゃんは机に置いてあつたリモコンを手に取り、テレビを点ける。

画面に大写しになつた芸人のバカ笑いが映る。

あつはつはという笑い声が、場違いにこの部屋に生まれる。なんでそんなにバカみたいに笑つてゐるんだよ、と我ながら理不尽だと知つていつつも責めたくなつてしまつ。

ボクたちは会話すら続かないんだぞ、なんとかしろよ、と。

「忍は今日、日中は何して過ごしてたの」

ケイちゃんはテレビから目を離さずに口を開く。

べつに熱心に魅入つてゐる様子もなかつたから、ボクと同じで目のやり場に困つた結果なのかもしれない。

「ああ、なんか、スーパーでおばあさんを助けたというか、手伝つたら、成り行きで家に着いて行くことになつちやつて、その人の家でお茶とケーキをご馳走になつたんだ」

ケイちゃんは驚いたようにボクの方をぱつと見たけど、目が合ひつとすぐに気まずそうにまたテレビの方へと視線を戻す。

「それは、また」ケイちゃんは何と言つていいのかわからないとでも言つたげに、たどたどしく唇を音もなく動かしてから「すごいわね」とだけ言つた。

「うん。知らない人だつたのに、なんかいつの間にかまた家に行く

約束までしちゃったんだ

「仲良くなつたつてこと?」

「うーん、それもあるんだうけど、そのおばあさんの田那さんで絵を教えることになつたんだ」

自分で言つうちに、なんでそんなことになつちやつたんだう、とあらためて首を捻りたい気持ちになつた。

老人を助けました。家まで着いて行きました。絵を教えるためにまた伺うことになりました。どれも本当のことなのに、結果だけ見ると嘘くさいこというか、すぐ現実味がない。

「あんた、昔から絵、うまかつたもんね。まだ続けてたんだ」

「続けてるというか・・・ボク、一応今、美大生なんだよ」

ケイちゃんは、今度は驚いてボクの方を見ることはなかつた。見知らぬおばあさんの家にのこのこ着いて行つてお茶をこ馳走になるこの方がずつと驚くべきことだとでも言つたげに。

「それは知らなかつた」

なんでやねん!とテレビからシッコミが入る。まるでこいつち側のタイミングに合わせたような見事なタイミングだつたけど、やつぱり場違い。余計なお世話といつやつだ。

テレビから吐き出される爆笑のエネルギーは、画面のこちら側には欠片も届かない。やつきよりずつと居心地の悪い沈黙だけが鎮座している。

知らなかつた、か。たしかに、ケイちゃんに言つた覚えはない。言わなければ伝わるはずはない。小学生だつて知つていい。なのに、ボクは忘れていた。

あらためて、10年間といつ空白の大きさを思い知らされたような気がした。

ボクがどんな学校にいようと、フリーターだつと外出好きな一トだつうと、ケイちゃんがそんなことを知るはずもない。いくらボクにひとつては当たり前のことであつうと、ケイちゃんひとつてはそうではないのだ。

でも、家族なら当然知っていることを知らないというのは、やっぱり「家族以外、つまり他人」とすばり言われているのと同じことだ、それがすごく居心地が悪かった。

日付が変わったあとに同じ部屋でテレビを見ている関係なのに、お互いがどんな職業についているのか知らないボクたちは、いつたいどんな関係なんだろう。

家族ではない。友だちでもない。知り合いではある。急な居候をあつさり受け入れてくれる、ただの知り合い。

ボクたちは、お互いのことを何も知らない。その事実だけが、この気まずい沈黙のすべてだった。

先に口を開いたのはケイちゃんだった。

「そつか、美大か。忍には合つてると思つよ。絵、うまいし」

「ボク、絵、うまかつたつけ」

形だけであつても、褒め言葉がケイちゃんから出てきたことに驚いて、少し声が裏返つてしまつ。

「なにそれ。絵がうまいから美大にいるんでしょう」

決してそういうわけでもないけど、それを言つても始まらないどうから、ボクは曖昧に笑つた。

「昔、描いてたじやない。空の絵」

また沈黙が降つてくるのかと思つていただけに、ケイちゃんがこう言いだしたときは、いつたい何のことだらうと戸惑つた。

当のケイちゃんも自分の言葉に着いて行けていなかつたようで、「なんで私はこんなことを言いだしたんだらう」と横顔が語つてゐる。でも、ちゃんと続きの言葉は出てきた。

「小学生のときだつたと思うけど、たしか宿題で空の絵を描かされたじやない。私は正直絵なんてあんまり好きじやなかつたし、ちょうど絵の具セットに入つてた『そらいろ』つていうので塗りつぶしちゃおう、とか思つてたの」

残念ながら、ボクにはそんな思い出はなかつた。絵を宿題にされたことはあつたかもしれないけど、それが空の絵だつたかどうかまで

は、記憶に残っていない。

「そのとき、あんたは言つたのよ。そういう絵の具は、空の色をしていなって。で、あんたの絵を覗き込んでみたら、すうくきれいな空の絵が出来あがつてた」

そこでケイちゃんは言葉を切つてしまつ。またテレビのバカ笑いだけがむなしく流れゐる。

そういう絵の具は空の色をしていなくて、でもボクはケイちゃんの言つことをそのまま使うのなら「きれい」に仕上げていて、だからボクは絵がうまい。そういうことなんだろうか。

ありがとうと言つべきなのかな、一応、褒められたみたいだし、と言葉を選んでいるところで、ケイちゃんはさつきよりずっと小さい声で急に続きを言つた。

「だから、あんたは人と違う見え方が出来るんだなって思つて、それがけつこうう羨ましくて、私とは違う人間なんだなと思つた」
これほど言葉に困つたことは今までなかつたと思つ。それくらい、ボクは何を言つていいのかわからずになつた。

人と違う見え方？空の色？羨ましい？違う人間？
いつたい、何のことなんだ。ケイちゃんはボクのことをいつたいどんな目で見ていたんだ？

「美大生は、充分、普通の人間だと思つけど」

ボクは混乱した頭で、とりあえず最初に出てきたセリフをそのまま言つた。

「べつに普通じゃないとは言つてない」

ケイちゃんはやけに断定的に言つ。

「ただ、私とは違うなと思つただけ」

「ケイちゃんとボクが違うのなんて、当たり前じゃないか」

ボクはやつぱり、ケイちゃんが言いたいことを捉えられないまま、思いついたことをそのまま言つ。

「そう。私とあんたは違う。忍はすごと思つよ」

「ありがとう。でも、それつて、ケイちゃんはすくべないつてこと

？」

「卑屈に聞こえた？」

「すゞぐ」

「でも事実でしょ」

「ちょっと待つて。ボク、今全然着いて行けでない
ボクたち、どんな話をしていたんだっけ？すゞいだのすゞぐないだ
の、そんな内容の会話だっけ？」

ケイちゃんは、何を言いたい？どうしてボクと皿を合わせようとした
ない？

「」めん。今日はちょっと疲れてるみたい。変なこと、書いたかも
しれないね」

ケイちゃんは眉間の間をつまむような仕草をした。

「もう寝るね」

そのまま部屋の電気を消してしまつ。テレビの光だけが残される。

「ケイちゃんは、すごい人だと思つよ」

ボクに背を向けて床にそのまま横になつたケイちゃんに、とりあえ
ずそれだけ言つた。

ほんまかいな、とテレビから声がする。

おまえはいちいち余計なところで口を出してくるんじゃないよ、と
睨む。この世に沈んでいる人がいるなんて欠片も思つちやしないよ
うな、満々の笑みだつた。

そいつをもう一回睨んでから、背を向けたケイちゃんにむづ一度声
をかける。

「ほんまだよ」

慣れない関西弁は、暗闇に溶けて消えた。

ほんまだよ（後書き）

お疲れ様でした。ありがとうございました。

黄色と白と空の青（前書き）

今回は妹・忍の一人称です。

黄色と白と空の青

私は黄色が苦手だ。

それはあの子の色だから。

私が手を伸ばしていいものではないから。

視界に黄色がちらついてきたとき、これは夢なんだとはっきりわかつた。

さつき忍との会話が変な終わり方をして、気まずくなつて背を向けて眠つた。

歯を磨いてない。化粧も落としてない。服すら、そのままだ。でもどうでもいい。億劫だつた。何もかも。

無意味に酸素を二酸化炭素に変えるだけの存在になつた私は、忍の寝息が聞こえてくるまでひたすら目をつむつて世界を暗くしていた。ペンライトの軌跡が暗闇に線となつて残るよう、いつの間にか視界に黄色い筋がちらついて、ああこれはいつもの夢なんだと漠然と思つた。

黄色は、あの子のヘアゴムの色だ。

長い髪を高い位置で括つて、いつも私の前を歩いている子だつた。歩むたびに結わえられた髪が揺れ、黄色いゴムがちらつく。

私は黄色に向かつて必死に足を動かす。早足に、小走りに、全速力で走つて息をきらしても、黄色はゆらゆらとやんわり私との距離を広げていく。

行かないで、とは言えなかつた。私は諦めていたのだ。
あの子には追いつけない。私では無理なのだ。

足場は土を跳ね、だんだん泥をくつつけて重くなつていく。

ただ目を見開き、自分を苦しめるだけの鼓動の速さを聞いている私。一度も振り返らないあの子の黄色い軌跡が見えなくなつても、動悸

はちつとも治まらない。

私を責めるように、ひたすら胸は内側から強く叩かれる。どうして動いているんだ、と。

そんなの、私が一番聞きたいのに。

目が覚めるとカーテン越しの朝日すでに部屋は明るくなつていて、隣で寝ていたはずの忍はいなくなつていた。玄関との一間しかないう部屋を隔てる扉の向こうでフライパンが音を立てる。

良い匂いだ。

急に食欲が涌いてくる。おなかがすいていたことに気が付いた、とう感じだ。

お腹がすく。あたりまえだ。生きていれば、食べないわけにはいかない。

「ケイちゃん、おはよー。ちゅうじい飯が出来ましたよー」

忍は昨日の朝と変わらない笑顔で私に接してくれる。夜の気まずさをまったく引きずらないでいてくれたことがありがたい。

「今日はスクランブルエッグにしてみました」

忍が机にお皿を置く。鮮やかな黄色。

「あれっ。ケイちゃん、卵、ダメだっけ」

私の表情を敏感に見分けた忍が硬い声を出す。

「ひょっとして昨日の田玉焼きも、アウトだった?」

「ううん、卵は好きだよ」

忍が早起きして作ったものを手つかずで残すわけにもいかないから、さつきまでの空腹感が嘘のようにしぼんだことはあえて忘れることにした。

忍は私の顔をちらつと見て、自分の分のスクランブルエッグに視線を落とす。

「ケイちゃんは、今日もバイト?」

「夕方からね」

「じゃあ、午前中は？」

「大学の図書館に行こうと思つてゐる。昼食は、適当にすませてくるからいらない」

「なんか、夫婦の会話みたいだね」

「離婚寸前のね」

箸が皿に当たる音、歯が卵をすりつぶす音が「ジジ」とばかりに大きく聞こえてくる。

「ケイちゃん」

忍は箸を置いて一つため息をつく。

「君はときどきさす」に血虚を訴つね

「離婚のこと？」

「ボクらの両親、離婚してんじやん。しまつた、とか思わない？」

「あんまり。忍が気にしてるなら、謝るけど」

「いや、ボクはいいんだよ。10年も前のことだし、それ私もあんまり気にしてないけど。10年つて、ほとんどのことは時効になるんだよ。あ、知つてる？ 口約束つて、1年で時効になるんだよ。授業で習つた」

「ケイちゃん、法学部なの？」

「法学部ではない。法学科」

「それって、どう違うの？」

「部長と係長くらい、違う」

「なにそれ、全然わかんない」

忍はおかしそうに顔を歪める。さつきまで硬い表情をしていただけに、すぐに笑顔に変換出来ませんでした、といつぎにちなさがあつたけど、それでも笑顔が本来持つ光がちゃんと宿つたものだつた。

「卵が嫌いだつたら、言つてね」

忍は私の皿にまだ多く残つたスクランブルエッグを見ないよつて、明るく言つ。

「ボクたち、たしかにお互いのことによく知らないけど、それつて少しずつなら埋めていけるものだと思つた。ボクはケイちゃんのこと

ともつと知りたいし、教えてほしい」

今度は、感情がちゃんと反映されたとわかる笑顔だった。

忍は、やつぱり私よりずっと大人だ。

昨日の氣まずさをちゃんと解いて、少しずつ良い方向に進んでいくとする。私にはそれが出来るだらうか。

「卵は、べつに嫌いじゃないの」

どう言つていいのかわからないけど、私も少しずつでも忍を見習つていかなくちゃいけない。

「夢を見たの」

「夢？」

「黄色い夢」

忍はさつぱり状況がわからないはずなのに、口を挟まずに黙つて先を促してくれる。

「ダメな。黄色い夢を見ると、いつも責められるような気がしちやつて。追いつけない私が悪いだけなの。スクランブルエッグは悪くないのに」

自分の説明の支離滅裂さに呆れた。

言葉にするどんどん夢のリアリティーが遠のいていくを感じる。意味不明な、寝言の延長線上のものでしかなくなつていいく。それでも、黄色い、あの軌跡は消えない。ゆらゆらと鮮やかに、私のなかに留まつて胸のなかを占領する。

ふいに私の皿に忍の箸が伸びてくる。

何事だらうと動けないでいるうちに、箸は忙しく忍との間を往復し、皿はどんどん地の色である白色になつていいく。

やがて何もなくなつてしまつと、忍は満足げに頷く。

「白くなつたね」

「・・・そうだね」

忍の口の端には、卵の欠片がひつひつしている。さつき私の分をすこいペースで平らげたからだ。

「白はあまりにも彩度が高いから、黒と同じで色としてカウントさ

れないんだ。つまりこの畠は今、何の色もないってことだよね

「・・・ そうなの？」

「 そうなの」

やけにきつぱりと言い切つてから、ふいに表情を和らげてから言つ。

「誰もケイちゃんのことを責めてなんかいない」

忍は振り返り、背にしていたカーテンに手をかけ、勢いをつけて端に引く。

「 今日はいい天気だね。洗濯ものがよく乾きそうだ」

もう一度私を振り返つて、忍はまた笑う。

「朝から天気がいいと、いいことありそうな気がしない？」

空は夏の強い光で空をどこまでも輝かせている。その先にあるとう宇宙空間さえ青で出来ているんじゃないかと思わせるほど、鮮やかだ。

自分の内側に空の青が流れこんで来る。空の青をバックにした忍がそつさせているんだ。根拠もないのにそんなことを思った。

世界は青い。

私は少しの間、黄色い夢のことも、スクランブルエッグが食べられない臆病な自分のことも忘れた。

ただ忍の青に魅入った。

黄色い丘と空の青（後書き）

お疲れ様でした。ありがとうございました。

ボク型、輪郭線（前書き）

今回は、妹・忍の一人称です。

「先生、どうでしょう」

年相応の皺を刻んだ顔に若々しい笑顔を浮かべた安曇さんが振り返る。手には新品のスケッチブックが握られていて、安曇さんがさつきまで向かい合っていたリングゴがモノクロとなつて映りこんでいる。

「その、先生っていうの、やめませんか？」

非難の意を込めて、スケッチブックは受け取らずに言ひ。

「いいじゃないですか。忍さんは僕の絵の先生だし、何も間違つていないです」

「自分より半世紀も長く生きている人に、その、敬称を使わせてしまうのは心苦しいんですよ」

悦子さんの田那さんである安曇さんに絵を教えるという名前で安曇家に通うようになつてからそろそろ1週間が経とうとしている。ケイちゃんのもとに転がりこんできてすぐに知り合つたことを考へると、ボクとケイちゃんのプチ同棲も1週間を迎えたということだ。一緒に住むようになつて改めてわかつたことは、ケイちゃんは驚くほど真面目だということだ。日中は毎日のよつに勉強のために図書館に出かけ、夕方からはバイトに出かける。正直、ボクとの接点はほとんどない。無料のお手伝いさんなんて大口を叩いたくせに、今のところ朝ごはんを作るくらいしか、ボクの仕事はない。

最初ははつきりと感じていたぎこちなさも、今はそんなに田立たなくなつていて。

仲良くなつたというよりは、ケイちゃん自身がボクとの生活に慣れってきたぶん、自分の我をうまく調整して当たり障りなく接することとがつまくなつてしまつたからなのだろう。

巧妙に壁を築かれている。

挨拶をすれば返してくれるし、ボクが作った料理を残さず食べてくれ

れることなんかはもちろん嬉しいけれど、こつもの感覚が離れた。

掃除や洗濯も一人分しかないから、ボクの田中は驚くほど空っぽだ。安曇さん夫婦のもとに居場所が出来たことはすこくありがたいだけに、この妙な呼び方はやっぱり居心地が悪い。

「半世紀、ですか。僕が80歳ということは、忍さんは30歳くらいだと考えていいんですか？」

「80歳つ？」

思わず声がひっくり返った。せいぜい70歳か、それより若いことさえ思っていた。

安曇さんはいたずらっぽく笑っている。

「忍さんは30歳でしたか。てっきり、もつと年若いのかと思つていましたよ。見誤つてしまつて、どうもすみませんでした」

「・・・それはこつちのセリフじゃないですか。言わないでくださいよ」

安曇さんの皮肉に、ボクの言い方もなんだか捨て鉢なものになってしまつ。

子どものようにいじけてしまつたボクに、安曇さんは穏やかに言つ。「わかつていますよ。忍さんは20歳前後。僕の見立てでは、19歳くらいといつていいろですかね」

「そうです。19歳です。30歳ではありますん」

「30歳では、嫌ですか？」

「・・・良い気は、しません」

安曇さんのような達観した年齢では大差ないのだろうが、まだ未成年の冠さえ取れていないボクにとって、20歳と30歳は全然違う。19歳と20歳でさえ天地の差だとすら思う。

年齢を上乗せされたことに不機嫌になるなんて、おばさんのすることだと思っていた。ボクたちは、いつだつて大人になることを夢見てきたのだから。

「大人っぽい」ことに憧れ、お酒やタバコみたいな、未知なものに

少なからず関心があつた。不良にこの二つの嗜みが欠かせないのも、彼ら自身も自分の年齢にコンプレックスがあつたからなんじやないかと、今ならそう思う。

「20歳になれば、もう大人だからさ」

10年も前にケイちゃんに言つたボクの言葉がふいに蘇る。そうだ。10年前は、たしかに20歳は立派な大人だつた。あのときたしかに確信していた、10年後のビジョンに今のふがいないボクは存在しない。

絵の具を絞り出せなくなつてずいぶん経つ臆病なボクは、あの頃のボクの中にはいなかつた。

「今のボクが本当に30歳だつたら、きっと自分を今よりずっと嫌いになります」

「忍さんは、自分が嫌いなんですか？」

「厳密に言つと、ちょっと違います」

計らずも安曇さんが拝聴の姿勢を取りだしたので、ボクはまた恐縮して話題を逸らす。

「あつ、スケッチまだ見てませんでしたよね。見ます。見せてください」

「忍さんは、自分が嫌いなんですか？」

安曇さんは自分の膝に置いたスケッチブックの上に手を置き、また同じことを言つた。さつきと同じセリフ。なのに、ボクはスケッチブックを無理にでも取り上げようとしていた手を止めた。安曇さんが先生をやつていたというのに、今、納得した。

この人は知つているんだ。答えを全部知つていて、ボクがどこでつまづいているのかもわかつていて、それでも問題を出す。試すために、ではない。導くために。

だから、ボクは口を開いた。少しだけ、かすれた声だつた。

「昔、何かの教科書で、読んだことがあるんです。自分はいつたい、何者なかつて」

ボクがケイちゃんのもとに転がり込んだのには、ボクなりの理由が

ある。それは確固としたもので、今でも疑いようのないものとしてちゃんとある。

でも、それはあくまで理由であって、動機ではない。

「私は・・・幼い頃からずっと、自分のことをボクと呼んでいました。今だって、親しい人にはボクという呼び方をしています。この年齢になれば、いい加減それがおかしいってことくらいわかっています。現に、安曇さんには意識して自分の一人称を出さないようになります。悦子さんにはボク呼びで話しましたけど、それを最初はもう会うこともない縁だと思つていたからです。楽なんです、その方が。私という呼び名では、窮屈なんです」

自分が女子だというくくりをされることに抵抗を感じた。

でも、だからといって男子になりたいと思つたわけではない。

10歳まではまったく同じように育つたケイちゃんが、普通の女の子がそうしているように、自分のことを「私」と呼んでいることに不満や不思議があるわけでもない。

ボクとケイちゃんが違うことなんて、当たり前だ。ボク自身、ケイちゃんにそう言つた。わかっている。

「ボクは、今までずっと自分と人が違うと思つていました。呼び名なんてわかりやすい違いじゃなくて、もっと根本的に、安易な同調が嫌いだつたんです。いつだって厳密を追つていたかつた。一般的に、『こうあるべき』人物像に自分を当てはめて、誰かと自分を重ねさせて、そつくりさんになることが嫌だつた・・・ボクは世界に一人しかいないことを、ボク自身、誰より強く感じていたかつたんです」

絵を描くことが好きだつた。他の誰でもない、自分だけの世界を紙の上いっぶぱいに広げて、ボクはそこに色を乗せていくときにだけ、自分という輪郭をはつきりと掴むことが出来ていた。

「あるとき、自分の描いた絵と他人の描いた絵の見分けがつかなくなりました。それが理由だつたわけではないと思うんですけど、でもきっかけになるには充分でした。美大つて、すごいところです。

絵のうまい人がいくらでもいる。自分の存在意義は絵だつて断言出来ちゃうような人がボクの他にたくさんいて、入学した頃は何でもなかつたはずなのに、ある程度技術を得て、いざ世界観を求められるようになつてから、自分があんなに主張したかつたはずの自分自身が、わからなくなつてしまつたんです」

今までボクが違うと信じ込んできた、ボクと人との差。そんなもの、なかつたんじゃないのか。

ボクは大量生産された製品のうちの一つで、シリアルナンバーだけが「隣」と「ここ」を区別してくれる、それだけの存在。

そして、シリアルナンバーだと信じて疑わなかつた「絵」が、実は値段とか、製造日とか、そんな無関係で無個性なものだつた。そう思い知らされた。

「自分は何者なのか、ボクはずつとそれを知りたかつた。それは、きつとボクが自分のことを持ちよと認めたかつたからなんです。取るに足りない存在じゃなくて、自分でくらい、胸を張つて自分を認めてあげられるようになりたかつたから。そうじやなきや、心細くてしかたなかつたんです」

10年も経つてからケイちゃんに会いに来た「動機」は、ボクとケイちゃんがどれくらい違う人間になつたのかを見せつけてほしかつたからだ。

美大なんて回りくどい場所じゃなく、社会で求められているような知識を学べる大学に入り、誰の前でも同じ「私」という呼びを自分に当てはめ、ブレることなく熱心に勉強をして高みを目指しているケイちゃんを見て、ボクはたしかに誰かと違うことを、こんなにも違うことを、思い知りたかつた。

「どうして人と同じじやダメなのか、自分でもわかりません。自分が特別な人間だなんて、思つていいわけではありません。それでも、ボクは」

自分の輪郭を掴んでいたかつた。

水で滲ませると塗り分けた絵の具がどんどん混ざつていくようになつた。

拡散させていくことが怖かつた。

他人と同じ、違ひがない、ボクがボクじゃなくても誰も、自分では困らないのなら、それはとても怖いことだ。存在を否定されたのと同じことだ。

だからこそ、ボクという呼び名が、絵という手段が、ケイちゃんという存在が、見原忍という人間に輪郭を与えてくれるのだと、ただ信じていた。

「もし仮に今のボクが30歳だとしたら、それは嫌です。10年前、まだ10歳の子どもだった頃に思い描いた大人に、今のボクはなれない。20年経つてもそのままだとしたら、今よりも10年ぶん、ボクは自分が嫌いになる」

安曇さんの膝に置かれたスケッチブックが目に入る。リングを模写したものだ。この1週間で、すごく上達した。もともとセンスがあるとは思っていたけど、この短期間にここまでレベルが出来あがるとは思つてもみなかつた。

でも、デッサンが仮に物体を模写するだけの手段であるなら、写真を撮るのが一番手っ取り早い。無慈悲なまでに正確に、カメラは3次元を「ピーしてみせる。

それなら、どうして図工の時間で、デッサンなんかするんだろう。建物の廊下に飾られるのが写真ではなく、高いお金を出してでも絵なのはどうしてだろう。

その理由を、今のボクは説明出来ない。

いつかこの矛盾に世界中の人たちが気がついて、絵という絵が燃やされることをただ恐れるだけだ。

こんなにも不確かで無価値なボクに誰かが気付いて、ゴミ箱によけてしまうのを漠然と待つしかないようにな。

「70歳と80歳では、違いますか」

安曇さんがゆっくりと口を開く。何が言いたいのかは、わからない。

「違うと思います。その、10年くらい」

「でも、忍さんはさつき、僕の年齢を間違えていましたよね？10

年は全然違つと言ひながら。どつして間違えたりなんかしたのですか？」

「それは、失礼なことをしたとは思います。でも、それは安曇さんそれだけ若々しかったからです」

弁解口調になりながらも、内心では非難したい気持ちですらいた。この人は何が言いたい？ 挑発しているのか？ それとも、本当にボクが年齢を見誤つたことを引きずつているのか？

「僕は、そうは思いません。年齢というのは、他人からしてみればひどく曖昧なものです。責めるつもりはもちろんありませんが、忍さんが勘違いをしていたのがいい例です」

ですから、と安曇さんは区切ると、諭すような穏やかな笑顔を変えた。ボクが間違えてしまつたときと同じ、いたずらめいた笑顔になつた。

「僕は忍さんを先生と呼ぶ。これまでどおり。そして、先生は僕の前でも自分を偽つた呼び名をしない。それでいきましょう」あまりにもぶつ飛んだ結論だつただけに、ボクは今までしてきた話の内容を、すっぽり忘れてしまつた。

「・・・そういう問題ですか？」

「ええ。そういう問題です。さつきも言つたとおり、年齢なんて些細なものです。だから僕が忍さんを先生と呼ぶことに何の支障もない」

自分の掘つた落とし穴に人が落ちることをシユミレー・ションしている子どものように、自分の名案に目を輝かせて、安曇さんはそう言い切つた。

ため息をついた。自然と、そうしていた。

「・・・好きにしてください」

「怒らせてしましたか？ 先生」

「ええ。あなたはどうだか知りませんけど、ボクとしてはけつこつ、真剣に話したんですから」

投げやりに言つて、「ボク」という呼び名を変えていないことに気が

付いた。

今さら「私」に戻すのは面倒だ。だって、この人がこんな調子なんだから。ボクだけ義理を通してやることはない。

「さて、そろそろお腹が空いた頃ではありますか?先生のためにケーキを用意していきますから、下に降りましょうか」

「それじゃ、遠慮なくご馳走になります。ボク、ケーキ好きですか。もう何の遠慮もしてやりません」

「それは頼もしい」

肩をいからせて階段を降りながら、やけに身軽になつたような気がして、不思議だった。

ボクは何かを失つたのだろうか。そんな気が少しもしなかつたから、不思議で仕方なかつた。

ボク型、輪郭線（後書き）

書いていてこんなに登場人物に共感出来なかつたのは初めてです。やっぱり、自分とは離れたキャラ作りというのは難しいですね。ここまで読んでくださつて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7780u/>

ラストティーン

2011年9月27日12時58分発行